



# 2022年度 年次報告書

熊本大学 教授システム学研究センター  
Research Center for Instructional Systems

〒860-8555

熊本県熊本市中央区黒髪2丁目40番1号

電話: 096-342-2895

ウェブサイト: <http://www.rcis.kumamoto-u.ac.jp/>

# 目次

目次	1
教授システム学研究センターの構成	2
教育関係共同利用拠点の7つの取り組み	3
共同利用拠点事業①	4
共同利用拠点事業②	21
共同利用拠点事業③	30
共同利用拠点事業④	35
共同利用拠点事業⑤	47
共同利用拠点事業⑥	67
共同利用拠点事業⑦	73

## 教授システム学研究センターの構成

教授システム学研究センター（Research Center for Instructional Systems; RCiS）は教授システム学の世界的研究拠点を目指す以下の3つの研究部門と2つの事業部門から構成されています。

### <研究部門>

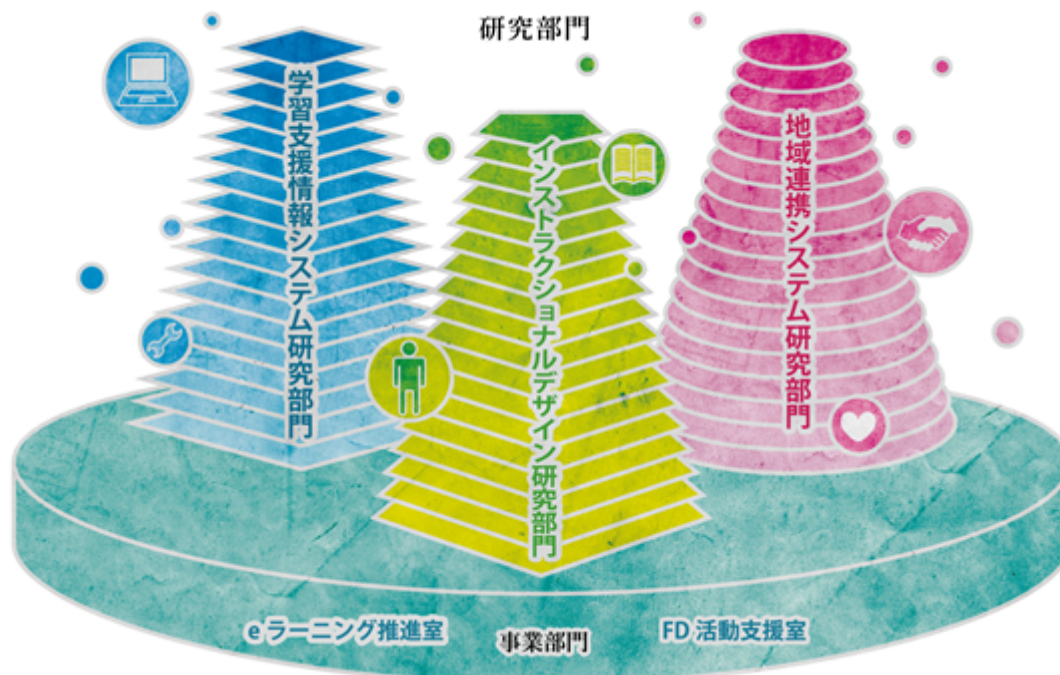
- インストラクショナルデザイン研究部門
- 学習支援情報システム研究部門
- 地域連携システム研究部門

### <事業部門>

- eラーニング推進室
- FD活動支援室

本センターは実践的フィールドを学内外に有し、高等教育や職業人教育を対象とした研究を展開していることが特徴です。

日本初の教授システム学研究拠点として「教授システム学、インストラクショナルデザインなら熊本大学」というイメージを発展的に具現化し、国内外の研究拠点との連携を進め、企業・高等教育機関などの連携研究組織および本学教授システム学専攻修了生などからなる連携研究員との共同研究を通じて、教授システム学を発展させ、社会に貢献します。



教授システム学研究センターの構成

## 教育関係共同利用拠点の7つの取り組み

本センターは、教育関係共同利用拠点として認定されています。

拠点名称:教授システム学に基づく大学教員の教育実践力開発拠点

共同利用分野:大学の職員(教員を含む)の組織的な研修等の実施機関

期間:令和3年度から4年度

教育関係共同利用拠点として、教授する力のうちの授業実践力(デリバリ)に対するノウハウを身に付けることに留まらず、デリバリの基盤となる授業設計力(デザイン)あるいはカリキュラム設計力を身に付けるための授業設計、教育評価、授業改善のための分析手法、改善手法等を体系化したオンライン教材、ワークショップ等の開発・提供といった活動を行っています。

延長が認められた令和3年度以降は、新たにFD担当者向け履修証明プログラム、LTテクノロジーを学習するワークショップ等を追加した上で、7つの取組として提供しています。

### <7つの取り組み>

1. インストラクショナル・デザイン公開講座
2. 「IDポータル」による情報提供並びに支援ツール・実力診断
3. 「教授システム学専攻公開科目」による学修機会の提供
4. FD研修講師・大学教育設計コンサルタント派遣
5. 大学教員志望者のための教え方講座(教育改善スキル修得オンラインプログラム)
6. FD担当教職員向け「FD活動デザイン講座」の公開
7. ポストコロナの教育とFDを強化するラーニングテクノロジー活用ワークショップ

上記7つの取り組みは、本センター内の各部門が協力し、運営しています。

# 共同利用拠点事業① 公開講座

本センターでは、インストラクショナル・デザインに関する  
公開講座を各地で開催しています。

## 本年度の取り組みの概要

教育関係者、企業における研修・教育担当者、医療関係者、日本語教師等、教育・研修を担当する幅広い層を対象に、インストラクショナル・デザイン(以下、「ID」)を紹介・学ぶ機会を提供する公開講座を2011年より実施しています。講座は、IDの基礎用語10個を学び、ARCSモデルの活用事例をワークで学ぶ入門編、および入門編で学んだID基礎用語をベースに、参加者同士のワークを中心に参加者自身の事例を改善し、IDを使う練習を徹底的に行う応用編から構成されています。

いずれの講座でも、事前事後学習ではMoodleを使用しております。例年、東京、名古屋、大阪、福岡、熊本の5会場、8回実施していましたが、今年度はCOVID-19の影響で対面のワークショップをZoomに置き換え、事前事後学習は例年通りMoodleを使用して実施しました(入門編5回、応用編3回)。

### ◆入門編◆

講師: 都竹茂樹、平岡齊士、天野慧、土屋理恵

学習目標:

- (1) IDの基礎用語10個がどのような場面でどのように活用できるかを例示できる(知的技能)
- (2) ARCSモデルの視点から、教育事例の課題点を指摘し、適切な改善方法を選ぶことができる(知的技能)

概要:

eラーニングでの自己学習や受講者同士のワークを通じてID10の基礎用語を学んでいきます。また、Zoomを使用したワークショップでは、10個の基礎用語の中からARCSモデルに絞り、講師が提示する教育事例に対する改善策の検討を受講者同士ワークで行っていきます。IDの道具をどのような場面でどのように活用できるか提示できるようになることを入門編の目標としています。

### ◆応用編◆

講師: 鈴木克明

学習目標:

- ・IDの基礎用語10個のうち1つ以上を応用して、自分の教育事例の改善案を提示できる(知的技能)

概要:

入門編で学んだID基礎用語をベースに、応用編では参加者同士のワークを中心に構成し、IDを使う練習を徹底的に行います。みなさんが取り組まれている教育事例について、IDを用いて改善案を提示できることを応用編の目標としています。

- \* 昨年度までに入門編の事後テストに合格し修了認定された方や、他の場でIDを学習し入門編の学習目標を達成している方等は、応用編から受講可能です。ただし、その際には、別途ご案内する応用編の前提課題へ取り組み、合格基準を満たす必要があります。

## 各地会場の参加者数

### 【入門編】 全受講人数:168名

各回共通:募集人数:40名 開講時間:10:00~16:30 時間数:5.5時間

No	講座名	開講日	会場名	受講人数
1	入門編	11/14(月)	Zoom	37
2	入門編	11/19(土)	Zoom	26
3	入門編	11/21(月)	Zoom	39
4	入門編	11/23(水・祝)	Zoom	38
5	入門編	11/26(土)	Zoom	28

### 【応用編】 全受講人数:82名

各回共通:募集人数:40名 開講時間:10:00~16:30 時間数:5.5時間

No	講座名	開講日	会場名	受講人数
1	応用編	1/26(木)	Zoom	24
2	応用編	1/29(日)	Zoom	29
3	応用編	1/30(月)	Zoom	29

## 入門編・応用編修了率の推移(レベル2)

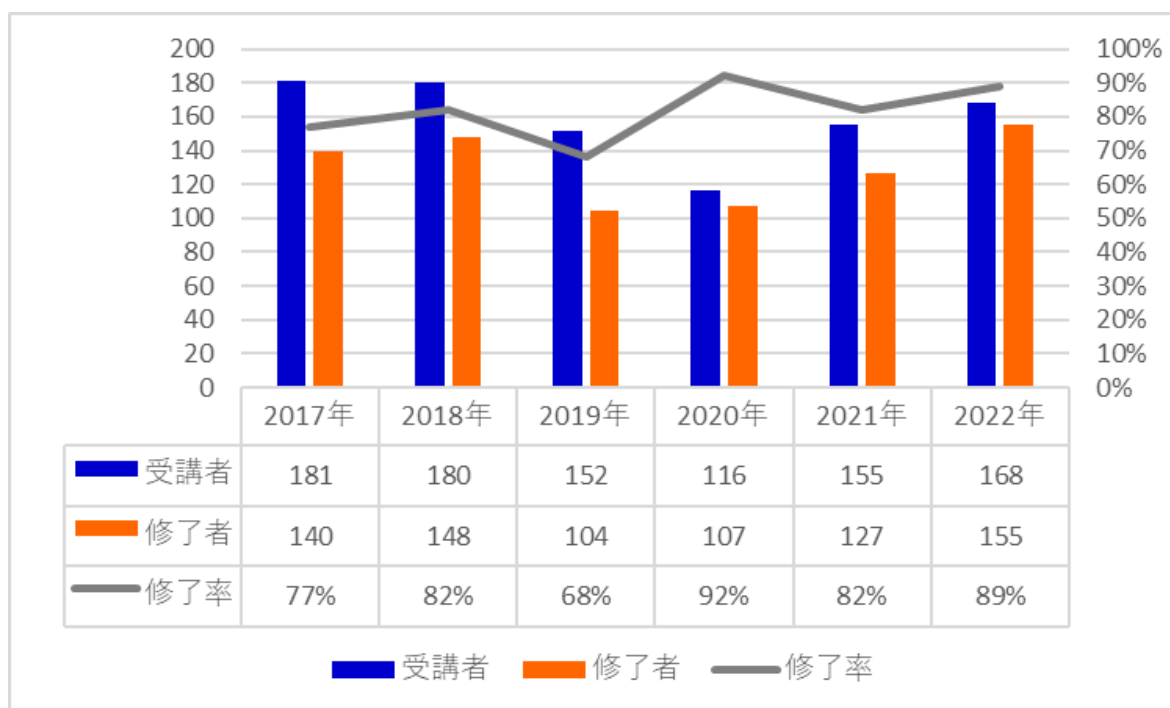


図:入門編受講者数に対する修了者数の推移

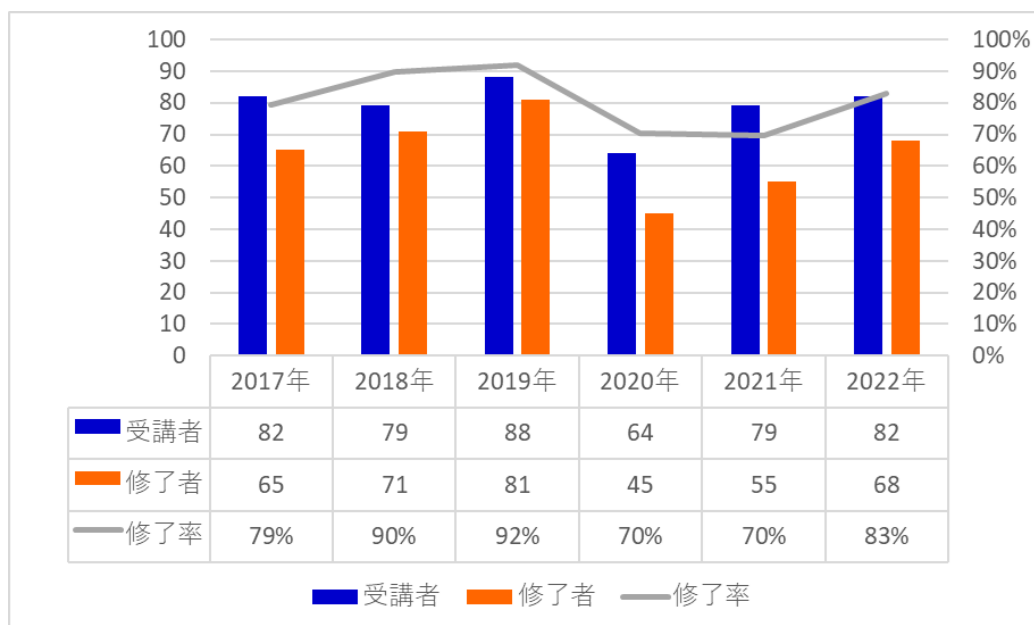
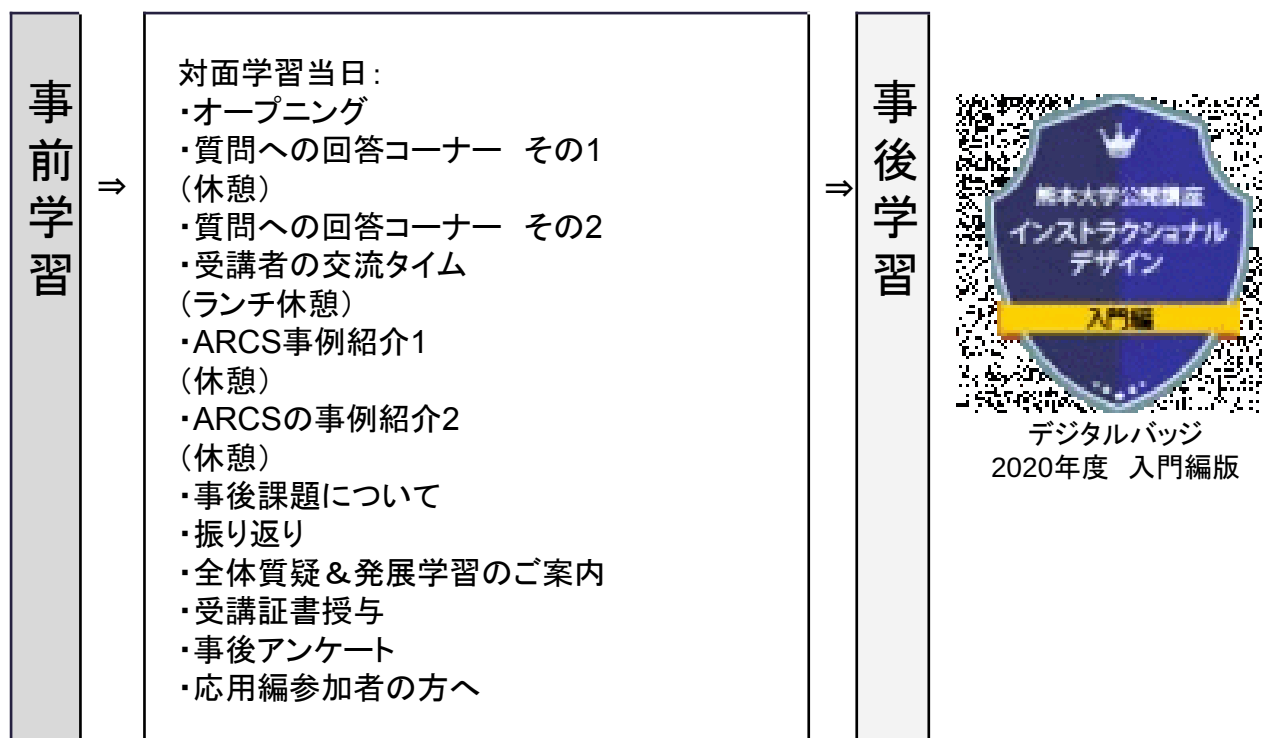


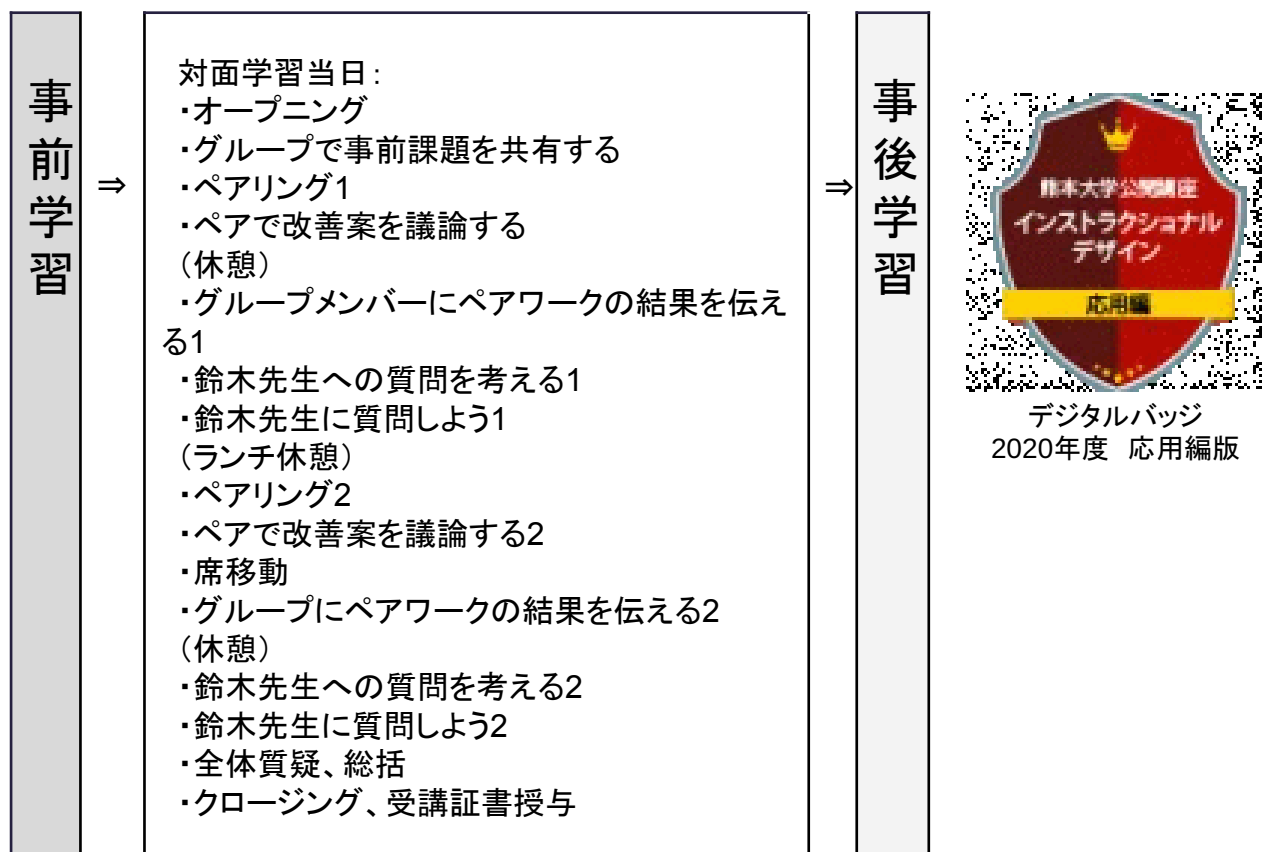
図:応用編受講者数に対する修了者数の推移



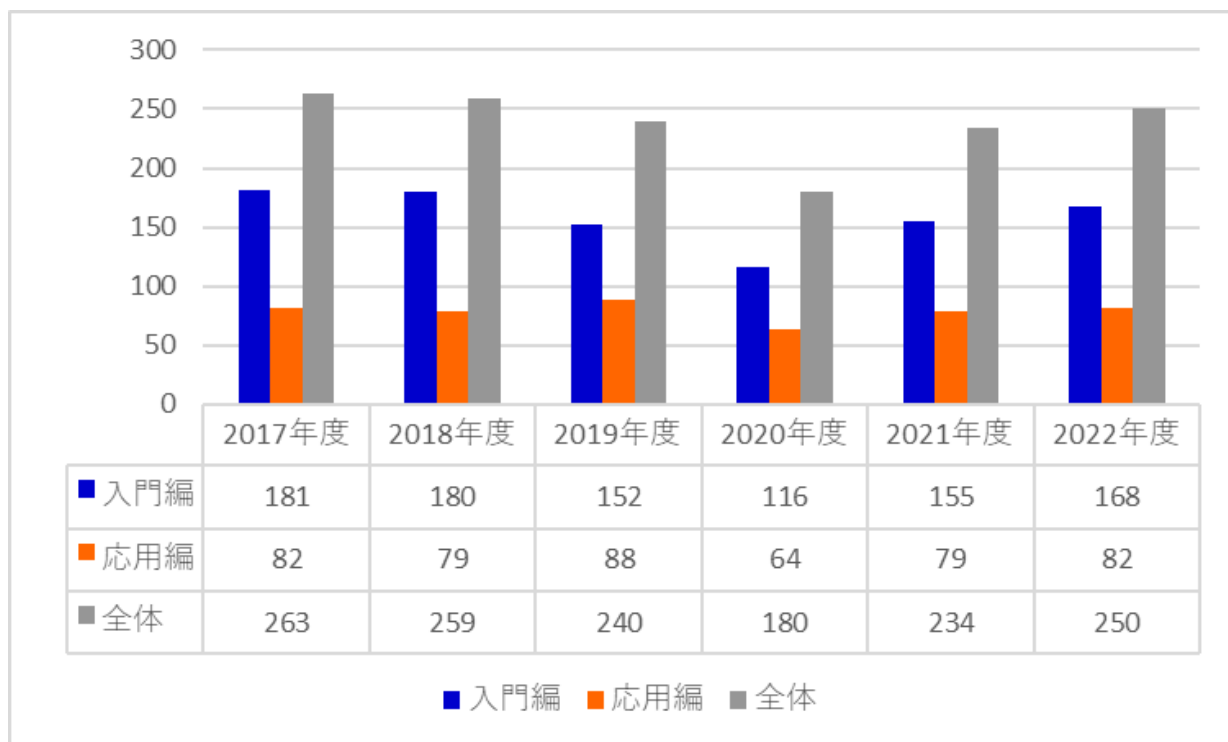
## プログラム(入門編)の内容



## プログラム(応用編)の内容



## 入門編・応用編参加者数推移



図：受講者数推移(2017年度から2022年度)

## 受講後アンケートの結果(レベル2:主観的評価)

2022年度の入門編・応用編受講者に対する受講後アンケート(入門編の受講者168名のうち155名(受講者のうち89%)、応用編の受講者82名のうち68名(受講者のうち83%)では、講座に対する印象をARCSモデルに基づき測定し、講座で掲げた学習目標を達成できたかについても、入門編と応用編別に回答を求めました。

### 1) 入門編・応用編についての印象

講座の印象について、ARCS別に7段階評価で測定し、全体回答の平均値が2017年度から2021年度までの間でどのように推移しているのか、調査しました。

その結果、各年度とも、入門編、応用編ともに、C以外の値が、おおむね6以上を示し、Cに関しても、入門編では4以上、応用編では5以上の数値を示し、講座への評価が高いことが確認できました。

以下の図で、講座への印象に関する回答結果を年度ごとに提示しました。

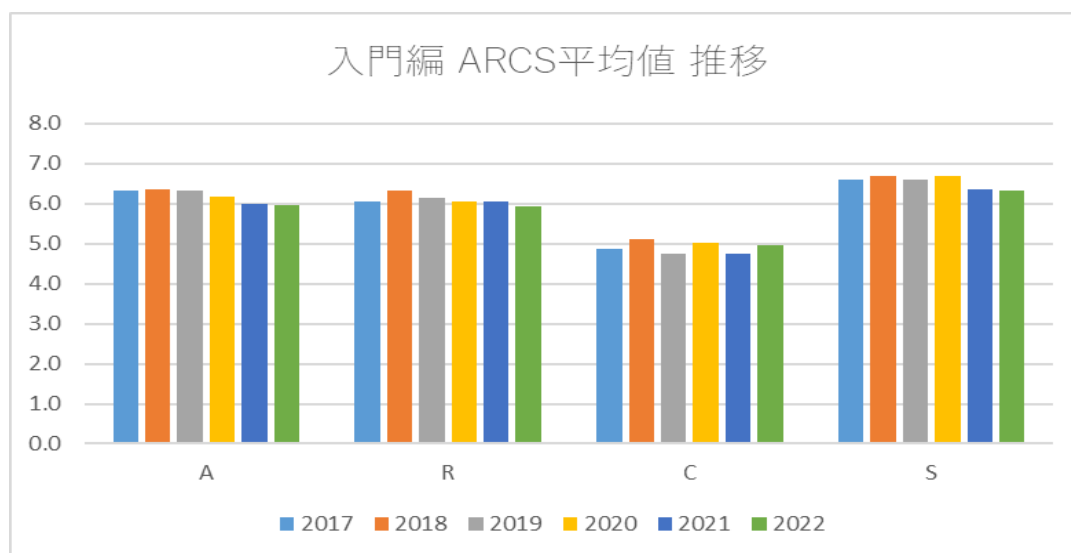


図: 講座(入門編)への印象に関するARCS平均値の推移(2017年度から2022年度)

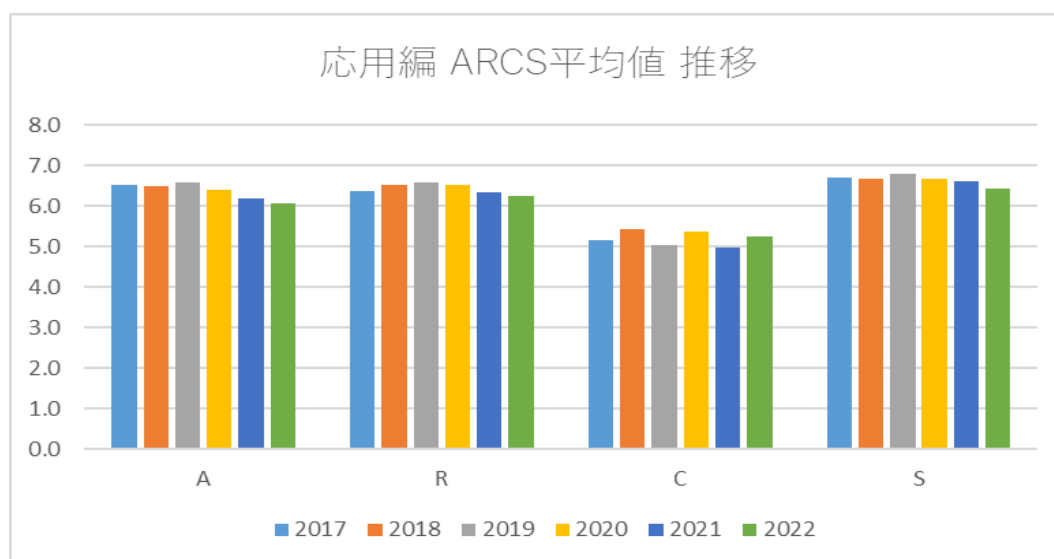


図: 講座(応用編)への印象に関するARCS平均値の推移(2017年度から2022年度)

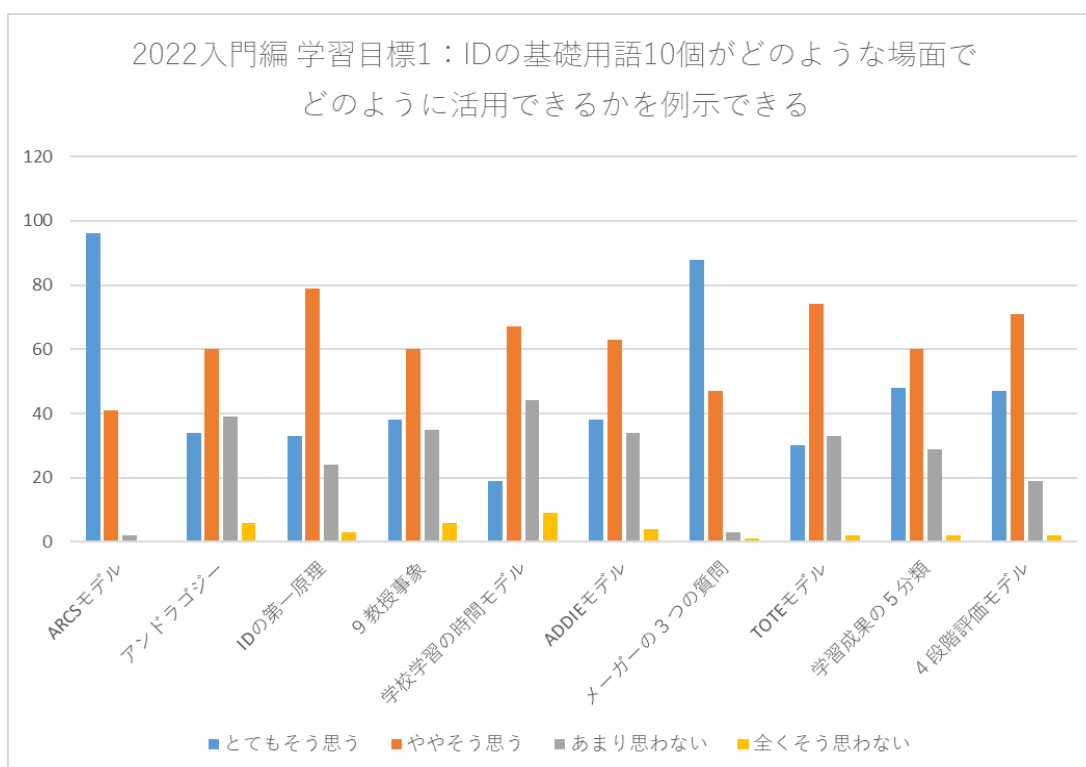


## 2) 入門編・応用編での学習目標達成状況について

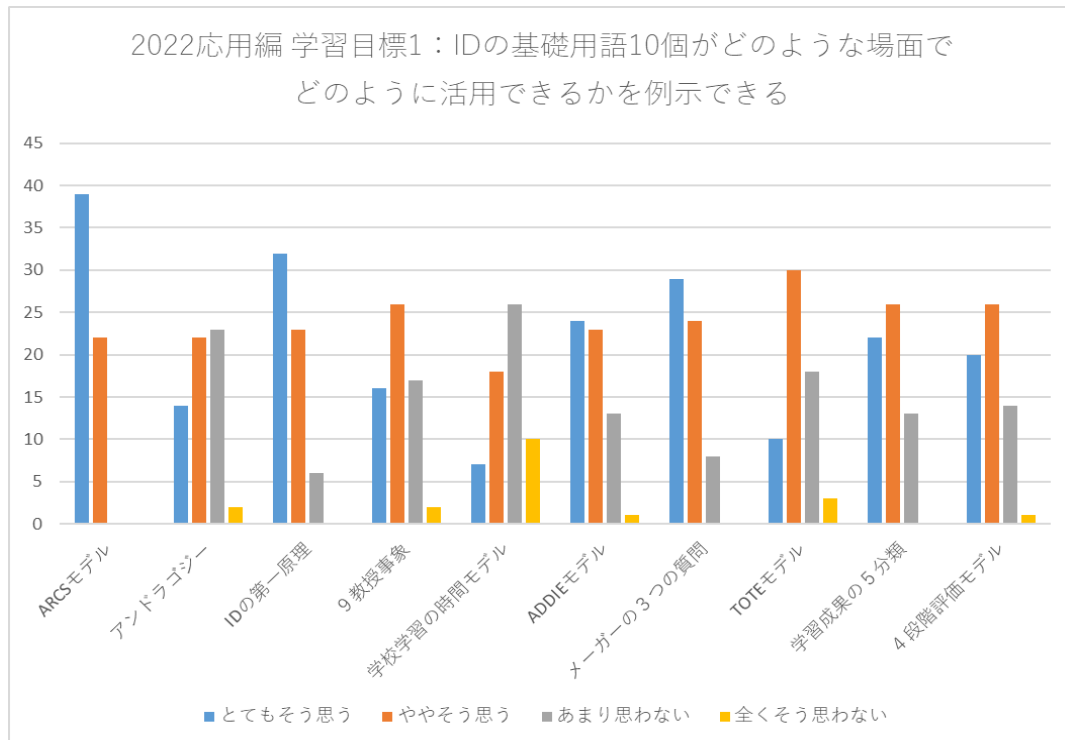
入門編で掲げた学習目標1の達成について、「とてもそう思う」、「ややそう思う」が高い値を示し、学習目標2(ARCSモデルの視点から、教育事例の課題点を指摘し、適切な改善方法を選ぶことができる)の達成についても、「とてもそう思う」、「ややそう思う」の回答が96%を超える高い値を示しました。

また、応用編で掲げた学習目標の達成については、「とてもそう思う」、「ややそう思う」が高い値を示し、学習目標2(講座で学んだIDモデルを自分の教育事例の改善に応用していこうと思う(態度))の達成についても、「とてもそう思う」、「ややそう思う」の回答が98%を超える高い値を示しました。

入門編と応用編での学習目標達成に関し、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」が過半数を越えている項目は応用編における「学校学習の時間モデル」の1項目のみでした。以下に、入門編学習目標1の到達状況と、応用編学習目標1の到達状況に関する回答結果を提示しました。



図：入門編学習目標1の到達状況(2022年度)



図：応用編学習目標の到達状況(2022年度)

## 参加者の声(レベル1)

応用編へ参加された方からいただいたコメントの一部をご紹介します。

### <プログラム設計・運営方法に関すること>

- とても受講しやすい雰囲気を感じ、運営の皆さんの人柄は素晴らしいなと思います。ありがとうございました。
- 貴重な時間を確保して参加する受講者に、いい加減なものを提供できない、研修という方法でどうしても伝えるべきこと、伝えたいことがあるから研修をしているのだ、という覚悟が必要と改めて思った。
- 鈴木先生の実は(というのも失礼ですが)学習者をとても大切に思っている姿勢、プロ意識に感銘を受けました。とても楽しかったです。学ぶことは楽しいことを実践している研修だと思いました。私もこのような研修(授業)を設計できるようになりたいと思いました。ありがとうございました。
- 発表のような時間がなかったので、緊張なくてよかった。その割には、参加している感があり、構成がとても良いのかなと感じた。
- 今回の研修もとくにファシリテータの方や都築先生が懇切丁寧でよかった。鈴木先生のわかりやすいお人柄も好印象だった。
- IDの使い方は非常に難しいなと思いましたが、使わないと上手な授業設計はできないと思いますので、仕事の場面で引っ張り出せるようにしたいなと思いました。
- 「受講者の入り口を揃える必要のある」研修や授業において、事前課題の提示だけではなく呼びかけをしながら入り口を揃えるためには、受講者任せにせず研修者側の呼びかけやチェック体制をしっかりとしなければと勉強になりました。
- 研修自体がIDに基づいて設計されており、一つ一つの内容や流れが意図的で、それ自体が大きな学びになりました。ありがとうございました。
- 今後につながる研修となりました。ご準備に際し入門編以上に練られていたとも感じました。ありがとうございました。

### <ペアワーク・グループワークに関すること>

- 業種や年代が違う方と意見交換をし、疑問点を先生方にお答えいただける機会はなかなかなく、貴重な時間でした。
- オンラインではありますが、特定の方と何度も色々な意見を交わすことができ、色々な立場の話の聞いたので、リフレッシュにもなりました。
- ほかの方とのディスカッションがとても良かった。
- グループワークが同じメンバーで何度も行われることで、ペアワークや先生への質問を通して何をより良くしていくのか自分の研修設計だけでなく他メンバーの研修設計が発展していく内容から学ぶことが多かった。
- ひとつの研修設計を洗練させていくことで、今後別の研修設計においても活用できるアイデアや学びにつながった。
- 入門編に比べ、皆さんが形式に慣れているのでスムーズに意見交換ができた。
- 議論及びQ&Aの中で、評価者、評価内容について詳細に伺うことができました。上長を評価者とする場合、現場へのヒアリング、説明、同意が必要であり、研修デザイン、評価指標設定にも影響することを認識することができました。
- 他者の知恵により改善シートの質が向上した。
- グループワークで違う分野の方とグループになったのが新鮮で良かったです。
- ペアワークやグループワークによって、自身の課題に対するフィードバックを得られた。

- ペアでのワークは自分と近い課題を持った方と十分な時間を使って話をでき、FBを受けられたのでとてもためになった。

<課題の添削・フィードバック・成果に関すること>

- 鈴木先生のアドバイスが大変適格で分かりやすかったです。ありがとうございました。
- さまざまな質問に答えていく中で鈴木先生のスタンスというか哲学というか、考え方があぶり出されてくるようで、面白かったです。
- 鈴木先生のFBコメントについて、自分だけでなく他の方のコメントを拝見できて非常に勉強になりました。ありがとうございました。
- 「教育は興味を持たせることが全て」といったような金言をいただけたことは今後の強みになると感じました。スピード感を持って改善が出来るように、スモールスタートでトライしていきたいです。
- 事前課題から事後課題まで、効果的で効率の良い「場」をいかに提供するのか、そのお手本を身をもって体験することができました。ありがとうございました！
- 課題が多く大変ではありますが、その分、学びも多くありました。
- IDについて現在も参考書やIDポータルや過去の鈴木先生のサイトなどから情報は得ておりますが、やればやるほど、教えるということはこういうことという本質的なことが分かり、さらに教えることがこういうことなのだったら、自分でこうやればできるようになるよねという個人がどうやったらある事柄に対してできるようになるのかという個人の「学びかた」がうまくなるということにつながるなとつくづく感じています。
- なぜ学校でこの「学びかた」をいまだに公教育で教えてくれないのだろうと残念でなりません。はやくIDの考え方に基づいた「学びかた」の授業ができてくれるとよいなと思っています。
- 鈴木先生のコメントは端的に的を射ていてとても勉強になりました。貴重な機会をありがとうございました。
- 「教えない教育訓練を作る」ということが一環されていることを公開講座を通して認識した。受講生が自走できるワクワクする教育訓練を目指したいと思います。
- 事前課題の内容に対する鈴木先生からのコメントがあった点。プロはこういう風に考えるのかというのがわかった点は大きい。
- 先生方のコメントを通し、授業設計における具体的な工夫が垣間見え、自分の授業計画を検討するヒントとなった。



## 6ヶ月後追跡アンケートの結果(レベル3)

インストラクショナルデザイン公開講座 応用編(2021年度)の6ヶ月後追跡調査アンケート(デジタルバッジ取得者55名のうち23名(バッジ取得者のうち41%)では、講座の内容をどの程度覚えているか(記憶度)、また受講後の業務にどの程度役立っているか(有益度)についての回答を求めました。記憶度では、ARCSモデル、メーガーの3つの質問、9教授事象が高く、有益度では、ARCSモデル、メーガーの3つの質問、IDの第一原理が高いという結果でした。また、記憶度・有益度ともに、「覚えていない」「役にたっていない」が過半数を越えている項目はありませんでした。

### <6ヶ月後追跡調査結果概要(2022年8月実施分)>

最終レポートで作成したアクションプランを計画通り実行したか回答を求めた結果、1週間、1ヶ月の計画では、7割以上の受講者が具体的なアクションを実行していたが、期間を経るごとに取り組んだ方の割合が徐々に減り、6ヶ月では4割以下となっていました。行動に移せなかった理由を見ると、「計画を修正途中」、「他業務の関係で多忙になり時間が取れなくなった」のように、計画の変更や多忙が多数理由として挙げられていました。また、公開講座で学んだことをもとに、自分が従事する教育事例の改善に取り組んだか回答を求めた結果、90%以上の受講者が「はい」と回答しました。以下、アクションプランの実行状況とIDを活用した教育改善への取組状況、そして、具体的にどのような取り組みをされて、どのような成果を収めたのか、その一部を紹介します。

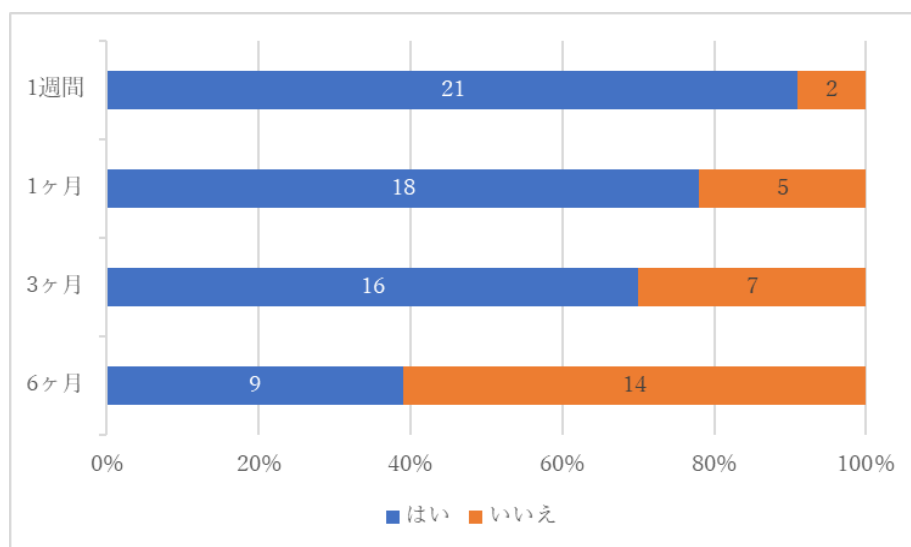


図:アクションプランの実行状況(n=23)

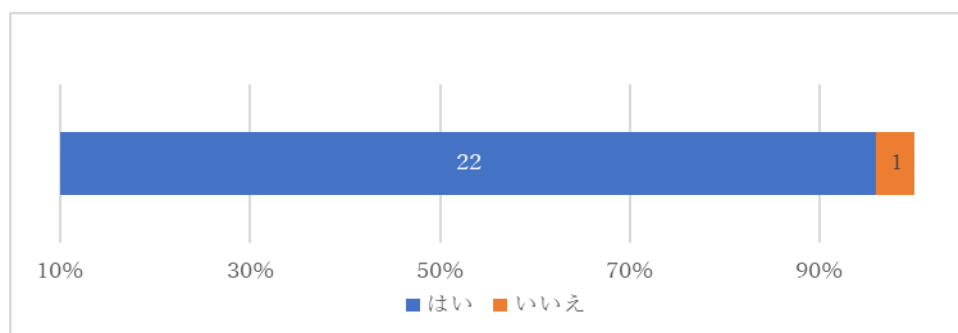


図:IDを活用した教育改善への取組状況(n=23)

表:6ヶ月追跡調査によって報告された取り組み事例とその成果

どんな問題に取り組んだか	取り組み	成果
<p>・学習者のレベルにかなりの差があり、上級者へのケアに迷っていた。</p>	<p>学習者の中にレベル差があり、上級者が時間を持て余してしまうことがないよう、チューター役になってもらった。チューターとして教師の補佐をしてもらうことで、自信をもってもらい、その態度を上司(新入社員研修だったため)に報告する旨を伝え、人事考課に影響することを意識してもらうことで、モチベーションの維持を狙った。</p>	<p>コースが途中でなくなってしまったため、不完全燃焼となってしまったものの、受講者の方たちとはその後の関係性が続いており、個別学習をそれぞれのペースで進めているとのことで、個人差はあれど学習の習慣化に少しつながったようであると手ごたえを感じている。</p>
<p>・研修内容が社員の目の前の業務に直結するテーマでない場合、必要性や重要性が受講対象者に伝わりにくく、参加率が低かったり、参加しても本気で取り組まない社員が多かった。</p> <p>・限られた1時間枠の中での講義とグループディスカッションのバランスを取るのが難しかった。</p>	<p>・研修テーマが自分には関連がないと思いつている受講者に対して「自分ごと」として考えてもらうために、自己チェックシートを提供した。間違ったところ＝学ぶ必要があること、受講後に再度チェックして、まだ理解できていない箇所については、事後課題として提供した資料を見て復習してもらうことにした。</p> <p>・講義の一部分は事前・事後課題として受講者に提供することにして、当日のワークショップではグループディスカッションとフィードバック時間を長く取るようタイムテーブル変更した。</p>	<p>グループディスカッション重視のワークショップにしたことで、参加者の事後アンケートに「グループディスカッションでいろいろな立場、視点での意見をたくさん聞くことができ勉強になった」「他者からのフィードバックにはっとした」「いつもの業務を離れてテーマについて議論したことが新鮮で良い刺激になった」などの前向きな意見が多数寄せられた。</p>
<p>・リフレクションを重視していなかったため、重視するように変更。</p> <p>・講義の意味付けが深くされるようになったと思います</p>	<p>講義の中で、常にRを意味づけるファシリテーションをおこなう。</p>	<p>講義後の振り返りに反映されるようになった。</p>
<p>実施している研修の内容の検証・評価が十分でなく、その時々の改善が十分にできていなかった。→受講後アンケートの検証等は十分に行ったので今後の研修の改善に役立てたい。</p>	<p>予定していた5,7月の研修では、準備できなかったが、今後の研修の実施に向けて、各種動画の作成を企画し、事前事後課題としての適用について準備中です。</p>	<p>大きな手ごたえを得ているわけではありませんが、動画の撮影には、理解をしていただける人が増えてきていることを感じています。</p>
<p>どんな問題に取り組んだか</p>	<p>取り組み</p>	<p>成果</p>

<p>学生がキャリアに関わって「自信」を持てていなかった。</p>	<p>ARCSモデルC-2を活用して、自分自身が過去と現在でどのように成長・変化しているかについて客観的に見るワーク(モチベーションマップづくり)に取り組みせ、他者との比較よりも自分自身と比較することが自信を持つための重要なポイントであることを意識づけるように工夫した。</p>	<p>実践後のアンケートで、自信が持てるようになった、他者との比較で劣等感を感じていただけだということに気付いた、といったコメントがあった。この取り組みをする前の回と今回を比較して、8割以上の学生が自信を持てるようになったと思うと評価している。</p>
<p>学生が授業に興味を持ってくれない場合がある。 応用できる知識を身に付けさせる。</p>	<p>授業の構成を分析した。興味を引き付ける内容になっているか、それが今後どのようなところにつながっていくのかをイメージできるかを分析して。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業アンケートで今後の役に立つという解答をしている学生が増えた。</li> <li>・事前課題を行ったものは、居眠りをした学生が減少した。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・4月の新入社員教育の効果の検証が出来なかった。</li> <li>・若手社員の研修を実施する機会が少ない。</li> <li>・自主的に学ぶ仕組みつくりたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研修募集時の資料を分かりやすくし、より興味を持ってもらえるように工夫した。</li> <li>・事前アンケートを行い、受講者の期待する内容を把握し、カリキュラムを調整した。</li> <li>・事後フォローを行い、研修効果の確認を実施。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新入社員については、全体の時間を長くしたこともあるが、前年よりは各内容を理解してもらえた。</li> <li>・若手教育については3回シリーズの研修を実施途中(残り1回)であるが、これまでの分については、受講者アンケートの評価が高い。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・今後反転授業を学校として取り入れるにもかかわらず、反転授業についてよくわかっていなかった。</li> <li>・学生の口頭能力を上げる授業をしたいが、できているがわからなかった。</li> </ul>	<p>職場で新しいコースのカリキュラムを担当することになった。私が担当したコースは日本語の入門で、目標は「日本に来たときにスムーズに日本の生活を送れるようになること」だった。メーガの3つの質問に基づいて、どこに行くのか(目標)を定期的に確認しながら授業内容を組み立てていった。そのコースは1ヶ月だけの短縮コースだったため、例えば、教科書の中で5課を扱うか、5課を飛ばして6課に進めか迷うこともあった。その際は「どこに行くのか」を確認し、より目標に沿ったカリキュラムを作ることができた。</p>	<p>応用編の講座を受講したときには予期していなかった事態にも自然とIDのツールを活用でき、自分の中で手応えを感じた。IDのツールを一言一句覚えてはいないが、IDの考え方が自分の中で修得できているのかもしれない。</p>
<p><b>どんな問題に取り組んだか</b></p>	<p><b>取り組み</b></p>	<p><b>成果</b></p>
<p>実習前に学生が講義や演習で学んだ知識・技術を活用して、</p>	<p>実習で患者に実践する際に、どのような知識、技術を活用すれ</p>	<p>学生から、具体的にどう行動すればよいか理解できたとコメン</p>

<p>実習の準備性を高める学習活動。</p>	<p>ばよいのか具体的な場面を通して学べるようにした。(関連性)特に、患者の安全性を守るためにどう行動するのかシミュレーションを通して学べるよう企画した。(注意)また、それらの実習前準備の企画を通して、担当教員からコメントをもらえるようにし、自信、満足度を高められるようにした。</p>	<p>トもらった。また、実習にむけて何を学習すればよいのかや不足している点に気づき、自己学習をすすめる姿が見られた。</p>
<p>内製化のみで提供していた研修から市場価値の向上や安定提供を目的に外部研修に切り替えることによりこれまでの研修との継続性を完全に担保委することが難しくなった。</p>	<p>これまで上長推薦のみとしていた研修の受講を手上げ制に変更した。それによる対象者の人数の増加に対応するために外部への委託も検討したが、同時に市場での実績をアピールし、「おもしろそうだな」と思ってもらうようにし、受講の動機に繋がった。</p>	<p>手上げ制にすることで、若手の初めての学びから管理職の学び直しまで対象者が増え、受講者の人数は倍増した。社内の共通言語として展開するスピードが加速した。</p>
<p>入学準備プログラムを運営してくれる学生スタッフに「やること・関わることの意義」を実感させてあげることができていなかった。</p>	<p>ARCSモデルを活用し、参加者(高校生)のアンケート結果を学生スタッフに共有することとした。例年、アンケート内容は肯定的な内容ばかりで、学生スタッフの頼りがいのある姿についての記載が多いため、それを学生スタッフに共有してあげることによって、「自信」「満足感」につなげることができたと感じている。</p>	<p>学生たちが「やってよかった！」と実感したという反応を多くくれたこと。</p>
<p>研修で技術を学ぶけれど、実践するまでに時間が経ち、手技を忘れてしまうという問題があった。</p>	<p>研修で手技を練習しても、実践するまでに期間が空き、手技を忘れてしまい、自信ももてないという問題があったため、研修で手技を練習し指導者からの評価で合格をもらい、その日に患者に実践することで、手技を確実なものにして、また自信をもてることを狙った。</p>	<p>研修の感想で「手技に自信が持てた」「練習での学びを活かした」などの感想をもらった。また手技を忘れる前に実践できた。</p>
<p><b>どんな問題に取り組んだか</b></p>	<p><b>取り組み</b></p>	<p><b>成果</b></p>
<p>漠然と研修に対して不安を抱く(ちゃんとできるようになるのか、自分にできるのか等)参加者が多かった。</p>	<p>研修の最初でまず目的(どこへ行くのか)をしっかり共有した。参加者が自分にできるか不安を抱えている→何をクリアすればいいのかがわからないのでは？</p>	<p>研修のゴールを明確化したことで、常に「目標に沿っているか」を意識し確認することができた。</p>

	と考え、研修で身につけるスキルをチェックリスト化した。	
これまで会社としてマネージャーの育成に真剣に取り組んできたことがなかった。	これまでの慣習として、教育や研修が「いい話を聞く」という認識があった。そ個から脱却するため「社会人はアウトプット」というキャッチコピーをつくり、事後学習やOJTを重要視していることを周知した。	マネージャーたち本人もマネジメントに関する学習や育成研修を欲しており、開始と共に拍手が起きた。ニーズに見合った研修を企画することができた。
試験のための勉強ではない気づきを与える授業内容の構築。	<b>試験のための勉強ではなく現場に出たときの応用について。</b>	授業アンケートから授業以外の話が今後生きそうというようなコメントが増えた。
学生のレベルにかなりバラツキがあり、どのようにして下層レベルの学生に理解させれば良いのか分からなかった。	学生のレベルを2段階に分けて、教材と文法の説明方法と変えてみた。特に、下層レベルの学生に対しては、対面での説明に加えて、課題の添削指導も実施した。	「これまでずっと理解できなかったことが、やっと理解できた」というコメントを学生から頂いた。また、「これからもう一度スタートラインに立って英語の勉強を始めたい」という学生もいた。
今回は受講生である部下とその上司が部下に教えることができるようにする2段式の研修を実施。受講生に対する指導よりも、その上司の指導法に気づいてもらう事が難しく、上研修を通しての上司指導のバラツキが大きい結果になった点があったので、今後の改善が必要と理解できた。	4段階評価モデル(学習)で受講生とその指導者になる上司へ事前に”お作法書”と”その解説動画”を作成して事前に取り組んでもらうことで、研修の目的と指導の方向性をベースラインを揃えて出来るようにすることに注力した。結果的には、その”お作法書”と解説動画”があることで、研修上の判断に悩ましい点について、共通言語(解釈)として活用ができるように以前よりはなったと考える。	受講生やその指導を担う上司が、解釈や方法論に悩んだ場合に、それらに立ち戻ってどうとらえて判断するかなどに仕えていた点、また上司の指導レベルを合わせていく点でも事前の”お作法書”と”解説動画”を見て学んでもらう事で受講生のレベル観が揃ってきた事。また指導役の上司のレベル観を揃えていけるようになった点は良かったと思う。受講生らには事前学習があったことでのレベル観を揃えてることができた点は評価いただけたと考える。
<b>どんな問題に取り組んだか</b>	<b>取り組み</b>	<b>成果</b>
・何のために学ぶのか、なぜ学ばなくてはならないのか、受講者が習得したスキルを実践して成果を振り返って考察する機会を作る。	アンドラゴジーのレディネスや方向付けの視点を参考に、ヒアリングを行い、要望にあわせてコンテンツを作成していった。 ID第一原理主義を参考に、どんなスキルを身に着けることができるのか、受講した教員が授業でどんなことが実施できるよう	アンケートで、バッジがモチベーションに影響していたこと。学修に役立つコンテンツだと、回答をもらった。

	になるのかを明示し、コース完了バッジをインセンティブとした。	
上司から「支援部門のメンバーに対し、コミュニケーション能力やコミュニケーションのひとつであるプレゼンテーション能力を向上させ、他部門との協業や同部門内での情報共有・情報交換をより良く行えるようにしたい。」との要望をいただき、ARCSモデルを中心にメーガの3つの質問の切り口からカリキュラムの検討を行い、研修を行っている途中です。	支援部門のメンバーのどのような点にコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力が不足していると感じるのか、上司に聞き取りを行い、上司が課題と考える具体的問題を解決するための基礎知識となるテキストを用意し、事前に学習してもらった上で、各自が学んだことを自己吸収しやすくなるようにグループディスカッションを盛り込んだ研修を計画しました。	参加者皆さんに感想やアンケートを取った結果、90%以上の方が、「自分に不足している点に気づけた」「改善する点や努力してみようと思う点が見えた」との回答をいただきました。
<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業時間内に前提知識の説明を行っており、演習時間が短くなっていた。</li> <li>・演習目標として技術の習得を挙げているが、習得できているかの評価が行えていなかった。</li> <li>・レポートや最終試験を行っていたが、学習目標にたどり着いたかを知るための適切な方法ではなかった。</li> </ul>	メーガ3つの質問で目標・方法・評価を明確にすることで、事前学習・演習・事後学習(レポート・実技チェック)で行うべきことを整理できた。目標に対して、ずれることのない評価方法を設定することができた。今までは、技術の習得を目標に挙げているのに、レポートや最終試験で評価している部分があった。	他の教員へ説明を行い、自分の担当部分以外でも実践してもらい、IDを活用することで学生が学習しやすくなることを体感してもらえた。特に、事前学習で前提知識を学習しておいて、授業中の説明を減らし演習時間を延ばせた部分は評判が良かった。演習時間を確保することで、演習中に技術の完全習得を実技チェックという形で複数回実施することができ、学生自身も自信につながったようである。

# 共同利用拠点事業②

## IDポータル

本大学ではインストラクショナル・デザインに関するイベントや文献等の  
情報を収集するためのサイト「IDポータル」を運営しています。





## 本年度の取り組みの概要

本センターでは、IDに関する情報収集のためのウェブサイト「IDポータル」を運用しています。IDポータルでは、IDと関連する学会やワークショップ等のイベント、IDに基づいた教育実践をまとめた論文情報、教育実践のお悩みをIDに基づいて解決するQandA等を提供しています。

今年度は、セッション、ユーザーベースでの分析が可能になるように、アクセス解析ツールとしてGoogleアナリティクスをIDポータルに導入し、分析を開始しました。導入の結果、IDポータルでは、メール文中のURLクリック、URLの直接入力、ブックマークからなどの直接訪問が多いことが分かりました。こうした訪問者は、一般にヘビーユーザーであると言われています。また、外部のサイトなどのリンクを経由しての訪問の場合、直帰率が他の訪問経緯の訪問よりも低い傾向にありました。これは、リンク経由の訪問者が、IDポータルに訪問した際に、訪問前に想定していたようなコンテンツが提供されていると感じたことを推測させます。これらのことから、IDポータルに愛着を持ちうる関係者に対し、IDポータル外部でもしっかりと情報を提供するタッチポイントを構築していくことの重要性を示していると考えました。こうした場としては、SNSの活用が考えられますが、現状では非常に少ない訪問しか生んでいませんでした。そのため、拠点担当の有志によって運営されていたFacebookページを、公式のSNSとして位置づけ、運用していくことといたしました(2023年1月より)。運用を開始したところ、投稿に対するエンゲージメント率が比較的高い状況にありました。このため、SNSを積極的に活用することといたしました。

さらに、「IDについて学びたい・知りたいという人にとって入口(ドア)となるウェブサイトでありたい」という新たなプラットフォームでより多くの方に本サイトを利用していただけるよう、次年度以降も拡張を進めたいと思います。

このサイトは、ID (Instructional Design : インストラクショナル・デザイン) を学ぶ人への応援サイト  
学習者がIDについて学ぶことを支援するために構築しました。  
初めてのの方は、[本サイトについて](#)をお読みください。

### 直近イベント情報

2022年5月28日 (土)  
2022年7月16日 (土)  
2022年9月17日 (土)  
2022年11月19日 (土)  
2023年1月21日 (土)  
[日本医療教授システム学会 2022年GOLDメソッド勉強会](#)

2022年6月11日 (土)~2022年6月12日 (日)  
2022年8月27日 (土)  
2022年10月29日 (土)  
2022年12月24日 (土)  
2023年1月28日 (土)  
[日本医療教授システム学会 2022年医療ID・実践事例研究会](#)

2023年1月21日 (土)  
[教育システム情報学会 2022年度第5回研究会「教育DXと実世界指向学習環境／一般」@拓殖大学およびオンラインハイブリッド](#)

2023年2月11日 (土)~2023年2月12日 (日)  
[情報処理学会 コンピュータと教育研究会 168回研究発表会@東京大学駒場キャンパス&オンライン](#)

2023年3月9日 (木)~2023年3月10日 (金)  
[人工知能学会 第97回先進的学習科学と工学研究会@岡山大学](#)

2023年3月16日 (木)~2023年3月17日 (金)  
[第15回日本医療教授システム学会総会学術集会@学研ビル イベントホール](#)

2023年3月18日 (土)  
[日本教育メディア学会 2022年度 第2回研究会「メディア・リテラシー育成を目的としたメディア制作実践のデザインと 学習者の評価／一般」@広島経済大学](#)

### リンク

**鈴木克明教授 Webサイト**  
IDに関する著書や経歴、直近のスケジュールを掲載しています。

**都竹茂樹教授Webページ**  
経歴や連絡先などの情報が  
あります。

**Yoshi Lab**  
合田美子准教授の経歴や最新  
情報があります。

**教授システム学専攻同窓会**

### おすすめ情報

教授システム学専攻の公開科目でIDの基礎を学習できます。おすすめの科目は以下です。

- [基礎的教育論](#)
- [ラーニング概論](#)

### 謝辞

本サイトは、JSPS科研費「[教育設計基礎](#)

図: IDポータルウェブサイト: トップ画面

## コンテンツ一覧

IDポータルは、教授システム学専攻の同窓生をはじめ、多くの関係者にご協力いただきながら、以下のコンテンツを提供しています。

コンテンツ カテゴリ名	内容
イベント	IDに基づいた研究・実践が発表される学会・研究会（日本教育工学会、教授システム情報学会、ICoME等）や、IDについて学習できるワークショップ（熊本大学公開講座等）について、随時、配信しています。
ID関連文献等	IDに基づいた研究・実践についてまとめた論文や学会報告を随時、掲載しています。
IDマガジン	IDと関連するブックレビューや熊本大学教授システム学専攻主催の「まなばナイト」等のイベントのレポートを事前登録者に対して配信、サイトへ掲載しています。尚、IDマガジンは、熊本大学教授システム学専攻の同窓生有志で構成される「IDマガジン編集委員会」によって長年、企画・運用されています。
お悩み解QandA	eラーニング・授業・研修をデザインする際に出てくるありがちなお悩みをレイヤーモデル（eラーニング、授業、研修等の質を5つの段階に分けて整理したもの）の5つのレベルごとに分類しています。「学習目標の種類によって、どんな学び方、教え方をすれば効率的か」や「知識やスキルではなく、望ましい態度を教えたい」等について、IDの観点からの解決策や関連するリソースを提供しています。
実力チェック	教授システム学専攻必修科目「インストラクショナル・デザイン」を題材に、架空の教材企画書が提示され、学習目標や事前/事後テストの内容、前提条件等の各項目の適a切性を評価する活動を通じて、授業設計に関する知識・スキルを身につけているか判断できます。
作業支援ツール	教授システム学研究センター／教授システム学の鈴木克明教授が執筆し、多くの人に利用されている以下の4つの書籍で紹介されている授業設計のための作業を支援するための機能・資料が提供されています。 <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 教材設計マニュアル</li> <li>2. 授業設計マニュアル</li> <li>3. 研修設計マニュアル</li> <li>4. 学習設計マニュアル</li> </ol>

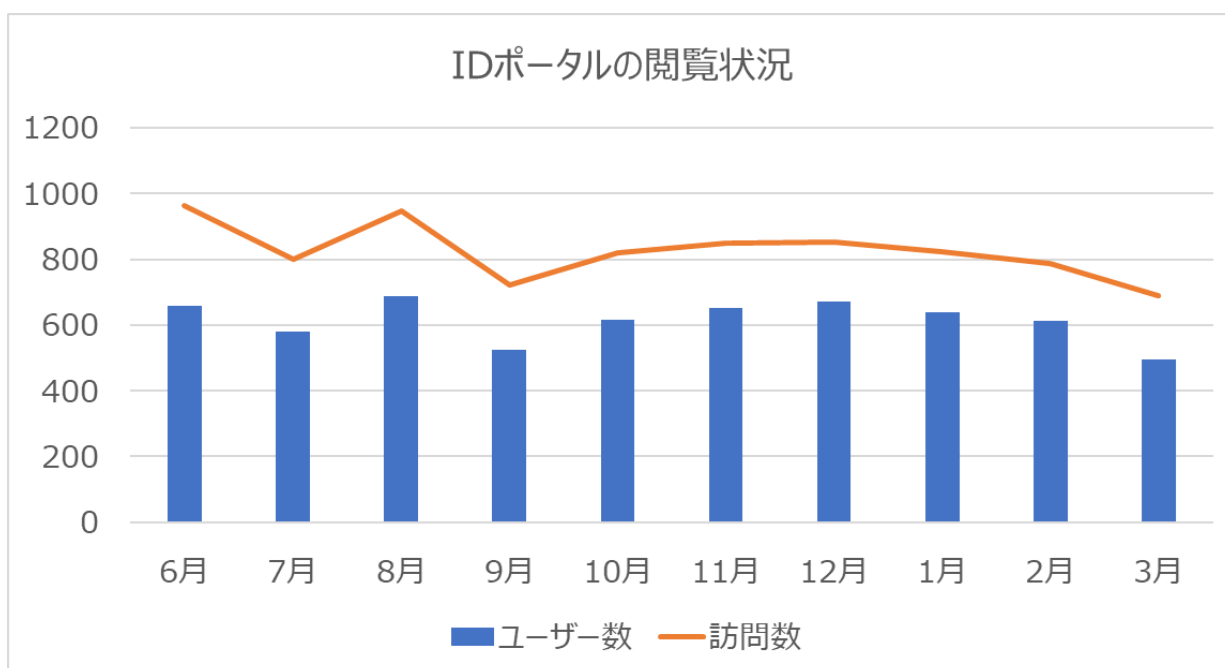
## サイトおよび各コンテンツへのアクセス数

以下に示すように、IDポータルは日々、多くの方にアクセス・利用されています。

表：月毎のサイトへのアクセス数

\* 2022年5月中旬よりGoogleアナリティクスによるアクセス解析データ取得開始

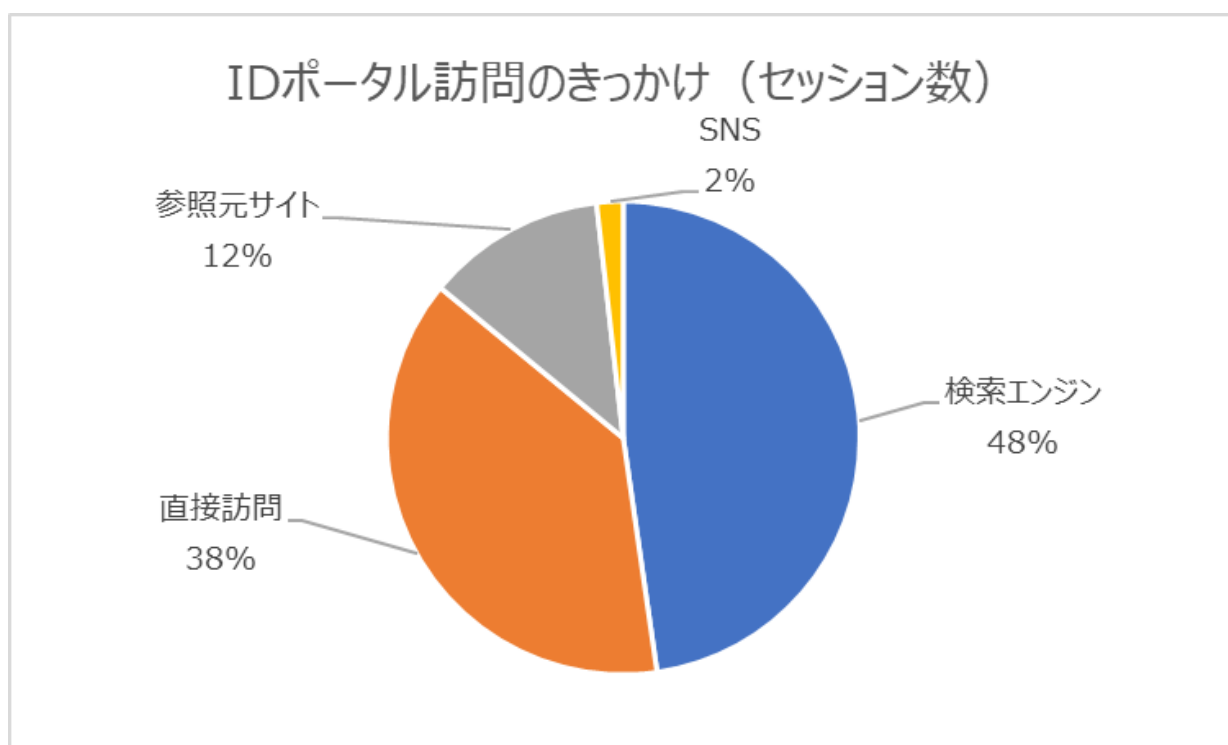
月 (2022年)	ユーザー数	新規ユーザー数	訪問数	直帰率	ページ/ セッション
6月	658	639	963	62.72%	3.16
7月	581	533	799	68.84%	2.30
8月	689	610	948	65.40%	2.34
9月	523	462	722	69.11%	2.21
10月	615	561	819	63.74%	2.47
11月	652	577	849	69.61%	2.03
12月	670	607	852	68.08%	2.09
1月	637	568	824	64.08%	2.63
2月	612	542	788	67.89%	2.35
3月	495	431	689	66.04%	2.35



図：IDポータルのユーザー数と訪問数

表：IDポータル訪問のきっかけ(参照元)(2022年6月-2023年3月)

	ユーザー	新規ユーザー	セッション	直帰率	ページ セッション
検索エンジン	2,873	2,754	3,997	66.90%	2.40
直接訪問	2,274	2,268	3,114	70.75%	2.15
参照元サイト	552	401	1,003	51.55%	3.27
SNS	112	107	139	61.48%	2.10
合計	5,542	5,530	8,253	66.45%	2.41



図：IDポータル訪問のきっかけ(参照元)(2022年6月-2023年3月)



図：IDポータルを紹介をするFacebookページへの投稿記事とアクセス状況（インサイト）  
※インサイトは2023年4月5日現在

表：IDポータルユーザー数/訪問数の時系列変化（全体とSNS経由）  
（2022年6月-2023年3月）

月	全体		SNS経由	
	ユーザー数	訪問数	ユーザー数	訪問数
6月	658	963	28	28
7月	581	799	4	6
8月	689	948	21	24
9月	523	722	2	4
10月	615	819	3	3
11月	652	849	1	1
12月	670	852	0	0
1月	637	824	50	56
2月	612	788	3	7
3月	495	689	5	3

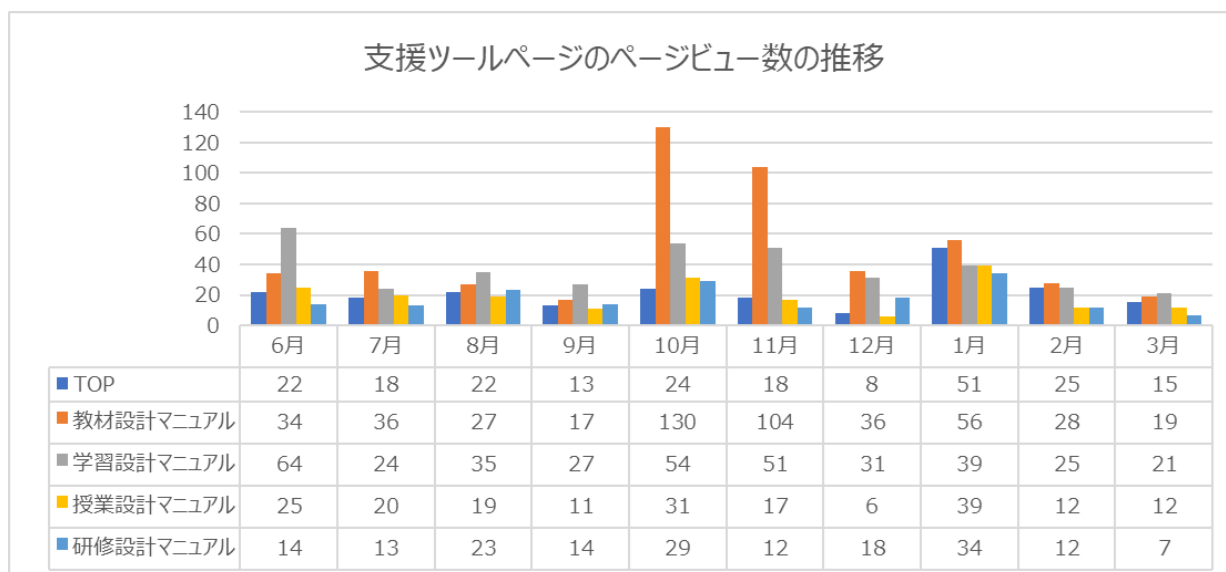


図: 大学教員支援ツール(各作業支援ツール)のページビュー数(2022年6月～2023年3月)

## ユーザー調査

2023年1月に、IDポータルに関するユーザー調査を行っています(有効回答数8件)。

表: IDポータルへアクセスした目的とその達成度(IDポータルに関するアンケート)

	本項目は目的ではなかった	達成したと思う	少し達成したと思う	どちらとも言えない	あまり達成しなかったと思う	達成しなかったと思う	総計
IDについて情報を得るため	0	8	0	0	0	0	8
業務や授業での悩みを解決するため	1	3	3	0	0	1	8
研究のアイデアを得るため	4	2	1	0	0	1	8
IDに関連するイベントの情報を得るため	1	4	2	0	0	1	8

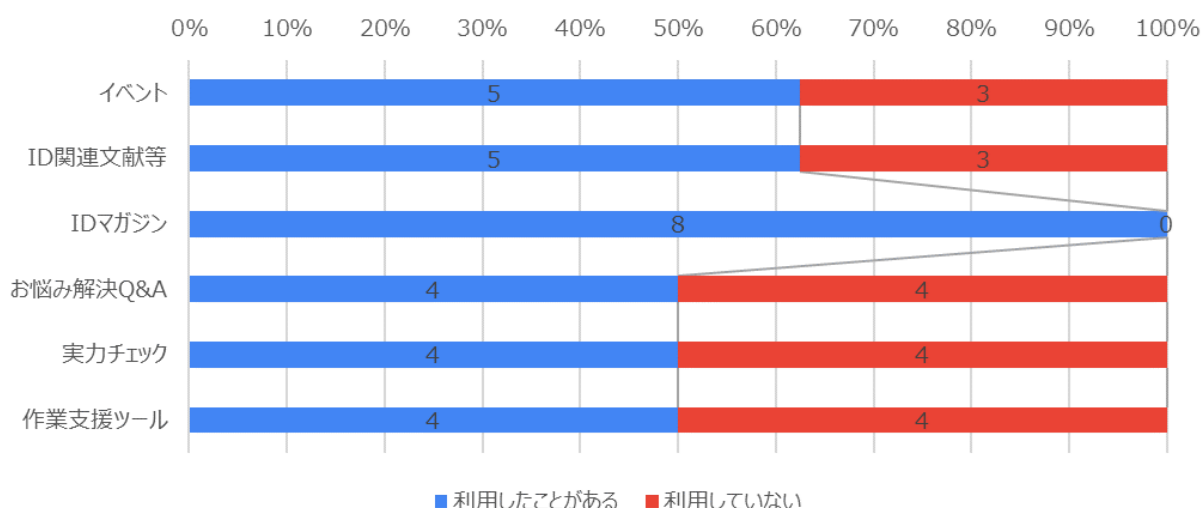
「IDについて情報を得るため」については、回答者全員が「達成したと思う」と答えています。ついで「IDに関連するイベントの情報を得るため」「業務や授業での悩みを解決するため」については「達成したと思う」「少し達成したと思う」と肯定的な回答が寄せられています。一方で、「研究のアイデアを得るため」については「本項目は目的ではなかった」の回答が最多となっています。これは、関連情報一般の収集、情報収集の場となりえるイベント開催情報へのニーズに対しては、対応ができているといえるのではないかと考えています。また、IDポータルへの訪問者は業務や授業の悩み

の解決を目指しており、研究のアイデアの獲得にはニーズが高くないことから、研究を主たる目的とせず、教育の実践を旨とする方たちへの情報提供ができていないのではないかと推察します。

回答者のコンテンツ毎の利用経験は、以下のようになっています。

表：IDポータルで利用経験のあるコンテンツ(IDポータルに関するアンケート)

	イベント	ID関連文 献等	IDマガジ ン	お悩み解 決Q&A	実力チェッ ク	作業支援 ツール
利用経験あり	5	5	8	4	4	4
利用経験なし	3	3	0	4	4	4
合計	8	8	8	8	8	8



本アンケートがIDマガジン経由で告知されたことも理由としてあげられますが、回答者のすべてがIDマガジンの利用経験があります。IDマガジンは登録者にプッシュ的に情報を送る機能を持ちます。ユーザが定期的にIDポータルに訪問しなくても情報が届けられることがメリットです。同様に、ユーザの行動を起点とせず、ユーザのもとへ情報を届けられる仕組みとしてSNS活用が有効であるという想定は、このデータからも導きえます。

表：IDマガジンの発行数及びイベント掲載数の比

No	項目	2020年度	2021年度	2022年度
1	IDマガジンの発行数	9	13	13
2	イベントの掲載数	49	45	48
3	登録された業績の件数	114	61	52



# 共同利用拠点事業③

## 公開科目

本センターでは、教授システム学専攻の大学院科目の一部をウェブサイトで公開し、一般の方々にも、広く学修の機会を提供しています。

## 本年度の取り組みの概要

現在、7科目9コースを公開科目として提供しています(科目名等は下記「公開科目一覧」を参照のこと)。本年度は、新コースのリリースなどはありませんでしたが、見直しのためのデータ収集の準備を進めました。

アクセス解析ツールとして、Googleアナリティクスを導入し、単純なページビューなどのデータのみならず、訪問数や訪問のきっかけ等、訪問者(学習者)のニーズがわかるようなデータを取得できるようにいたしました。

以下にお示しするデータは、新規に設定したGoogleアナリティクスからのものとなります。今後は、こうしたデータを参照し、学習者のニーズに沿った科目展開やコース修正に活かす方向で進めてまいります。

## 公開科目一覧

### 【博士前期課程】

**特別研究 I (2007年度版) : 日本語版・英語版**  
研究の第一段階に位置づけられた科目

**基盤的教育論(2007年度版) : 日本語版・英語版**  
教員免許課程における教育原理・教育方法論・教育心理学のエッセンスと教授設計理論の基礎について短期間でカバーできる科目

**eラーニング概論(2009年度版) : 日本語版・英語版**  
eラーニングを教育に導入するための基礎科目

**基盤的情報処理論(2010年度版) : 日本語版・英語版**  
**(2016年度版) : 日本語版・英語版**  
eラーニング教材の開発に必要な情報処理基礎知識(特にWeb活用)の修得を目指す科目

**インストラクショナル・デザイン II (2014年度版) :**  
**日本語版・英語版**  
eラーニングを組み入れた教授システムの青写真と導入プロセスの提案、現状システムの改善計画の提案ができるようになることをめざす科目

**経営学特論(2016年度版) : 日本語版**  
企業・組織内の人材育成や教育について構想・企画・検討するための基礎を培う科目

### 【博士後期課程】

**教授システム学研究総論(2015年度版) : 日本語版・英語版**  
博士後期課程の導入科目として位置づけられた科目

## 公開科目トップページ・各科目へのアクセス状況

[公開科目トップページ](#)・各科目に対するアクセス状況は以下の通りです。なお、本年度の5月に前述のGoogleアナリティクスを導入いたしました。昨年度とデータの取得方法が異なるため従前のデータとの比較は行えませんが、本年度のデータを紹介します。

※公開科目トップページへのアクセス状況は閲覧された回数(PV: ページビュー数)とページ別訪問数を示し、各科目ページへのアクセス状況は公開科目トップページで該当する科目がクリックされた回数を示します。

表: [公開科目トップページ](#)のページビュー数と訪問者数(2022年6月～2023年3月)

	ページビュー数	ページ別訪問数
6月	213	183
7月	198	167
8月	166	132
9月	217	180
10月	179	158
11月	169	157
12月	146	123
1月	201	180
2月	204	175
3月	177	152
合計	1,870	1,607
平均	184	160.7

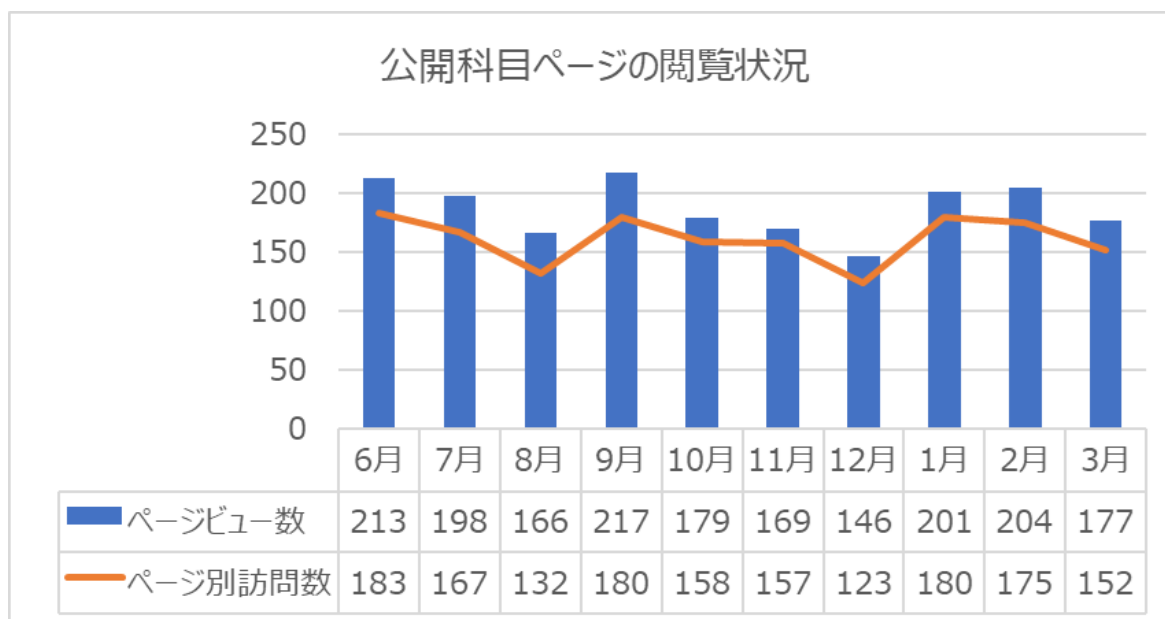


図 公開科目ページの閲覧状況(2022年6月～2023年3月)

表 公開科目ページから各科目ページへの遷移数(2022年6月～2023年3月)

科目名	クリック数
特別研究 I (2007年度版) ※HTML版のみ提供	135
基盤的教育論(2007年度版) ※HTML版のみ提供	112
eラーニング概論(2009年度版) ※HTML版のみ提供	108
基盤的情報処理論(2010・2016年度版) ※2010年度版はHTML、2016年度版はMoodle版	(2010年)41 (2016年)18
インストラクショナル・デザイン II (2014年度版) ※Moodle版のみ提供	136
経営学特論(2016年度版) ※Moodle版のみ提供	54
教授システム学研究総論(2015年度版) ※Moodle版のみ提供	86

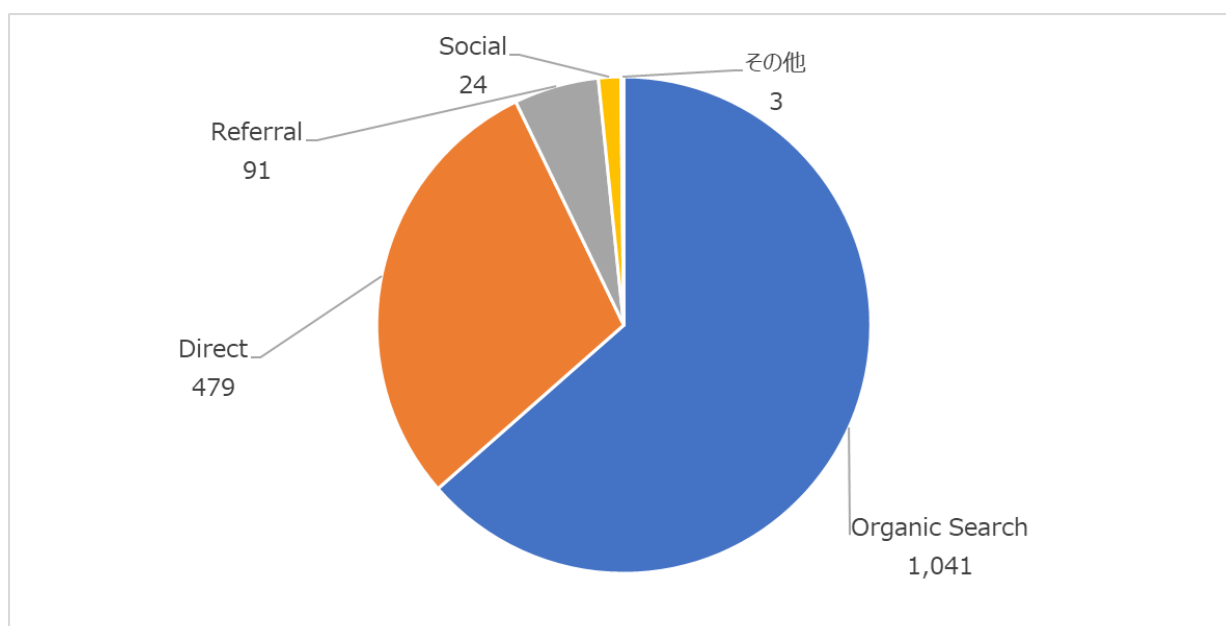
次にお示しする表は、教授システム学研究センター/教授システム学専攻ウェブサイト(<https://www.gsis.kumamoto-u.ac.jp/>)を訪れた訪問(セッション)のうち、公開科目トップページを閲覧した訪問(セッション)のみを抜き出して、どのようなきっかけで発生したかを確認したものです。検索エンジン経由(Organic Search)がもっとも多く、URL直接入力やブックマーク経由等(Direct)が主となっています。外部サイトに設置されたリンク経由(Referral)の

訪問は、数こそ少ないですが、訪問した際の訪問ページ数が多くなっており、熱心に閲覧していることが推察されます。

公開科目ページやコンテンツ自体を充実させるも重要ですが、外部サイトで紹介してもらう機会を設けるといったような外部的な施策も検討する必要があることを示唆しているように考えられます。今後、こうした広範な施策を含め、検討していきたいと考えております。

表 公開科目トップページを閲覧した訪問(セッション)のきっかけ  
(2022年6月～2023年3月)※上位4項目を記載

	ユーザー	セッション	ページ/セッション
全体	1,294	1,638	7.60
Organic Search	842	1,041	7.76
Direct	408	479	6.83
Referral	54	91	9.27
Social	11	24	5.96



図：公開科目トップページを閲覧した訪問(セッション)のきっかけの割合  
(セッション数に基づく)

# 共同利用拠点事業④

## 講師派遣

本センターではインストラクショナル・デザインについて学ぶ機会を提供するために、講師派遣をしています。

## 本年度の取り組みの概要

昨年度に引き続き「FD研修講師・大学教育設計コンサルタント派遣」の継続・拡大を図りました。他の取り組みとも連携しつつ、可能な限り、受講者参加型のFD研修を実施しました。昨年度に引き続き、コロナ禍の影響を受け、オンラインでの研修を多く実施しました。オンライン研修では、同期で実施するもの、非同期でオンデマンドの動画を提供し事前に質問を受け付け、当日の質問と合わせ回答しながら進める研修や、ビデオ会議システムの小グループ用会議室機能を活用した受講者間での協調学習などを含む多様な形態で提供しました。また、受講者に対し、研修前後の非同期学習を体験してもらうことで、自己調整学習を意識した授業設計と実施を促進するためのFDに寄与しました。

講師派遣として、4名の教授システム学研究センターの教員が、講師として、大学教職員対象の研修を17件、その他を対象とした研修を14件、のべ、31件行いました(表1参照)。昨年度は、大学教職員対象の研修を22件、その他を対象とした研修を19件、のべ41件でした。本年度の研修数は2022年度と比較して、大学教職員対象とした研修が5件減り、その他を対象とした研修が5件減り、のべ件数で10件減少しました。

本年度の大学教職員対象の研修では、大学教員1190名、大学職員324名、大学院生5名、その他10名、のべ1529名が本センターの研修を受講しました。

一般・その他の研修では、対象者を設定していない一般を対象とした研修、その他として、専門学校教員、医療関係者対象の研修について整理しました。一般・その他の受講者は410名で、本年度の講師派遣による受講者数は、675名でした。

研修の内容は、授業設計、教材設計はもちろん、人材育成、学習環境と学習経験、言語教育や安全講習の改善等、多岐に渡りました。研修の規模も、10数名の研修から、100名や300名を超える研修がありました。主催者も、大学だけでなく、企業、各種財団、学会等で、それぞれの団体のミッションや課題に合わせ、研修を行いました。

表2は学校種別による参加者内訳を示しています。大学教職員対象の研修をみると、大学教員のうち、国立大学教員が180名、私立大学教員が1202名、公立大学教員が147名でした。

また、地域別にみると、大学教職員対象の研修では、地域が特定できない不明を除き、関東が523名で一番多く、次いで多かったのは、中部からの348名でした(表3参照)。一般的に大人数を対象とした研修やセミナー等では、受講者の地域を特定することが難しく、不明数は大学教職員対象研修で300名、一般・その他対象研修で、80名となっています。一般・その他でも、不明を除くと、関東からの受講者が445名で一番多くなりました。

本年度も、依頼者のニーズに合わせ、受講者がより能動的で積極的に参加できる研修を提供してきました。次年度も、さらに、受講者が自ら学ぶ研修、研修後も学び続けられるような研修を提供していきたいと考えています。

表1:研修の対象者

	大学教職員対象				一般・その他対象			
	2021年度		2022年度		2021年度		2022年度	
講師派遣件数・ 受講者数	22件	1897名	17件	1529名	19件	2416名	14件	675名
大学教員	13件	1208名	16件	1190名	5件	180名	7件	241名
大学職員	5件	48名	5件	324名	0件	0名	3件	10名
大学院生	4件	95名	1件	5名	1件	20名	5件	14名
その他	5件	546名	0件	10名	19件	2216名	10件	410名

## 講師派遣・対象者別に見た派遣件数

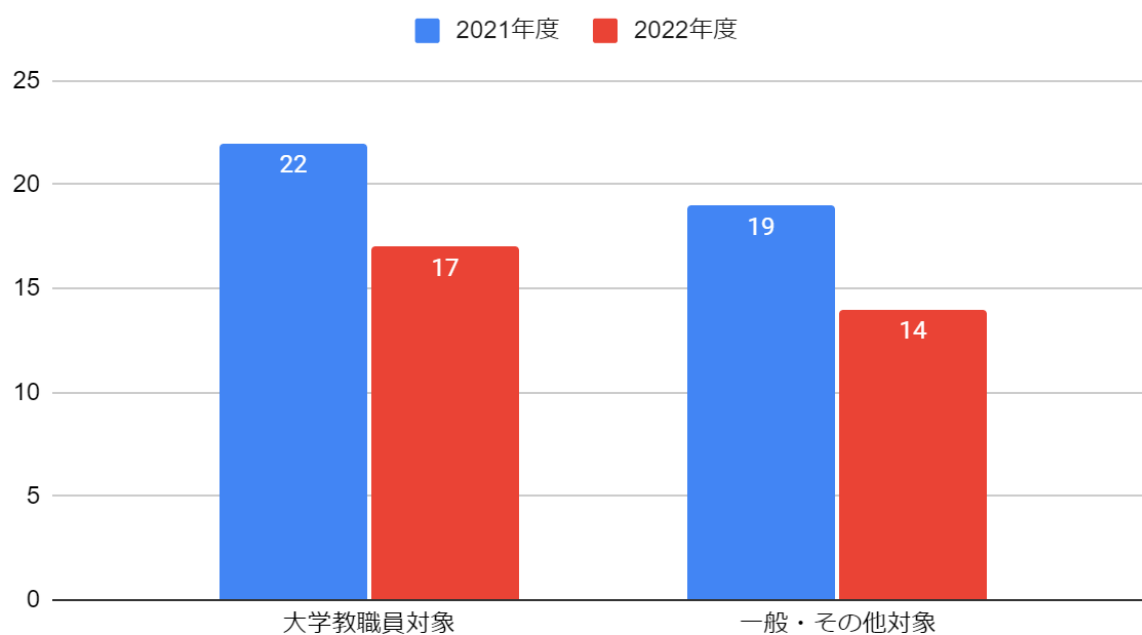
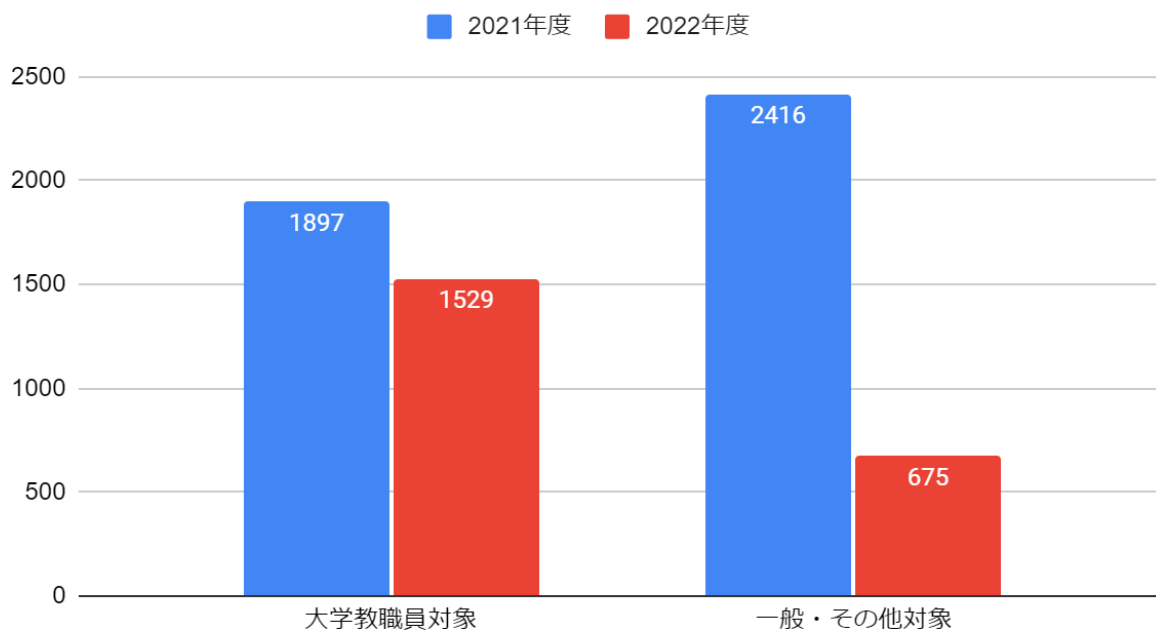


図:対象者別に見た派遣件数(2021年度と2022年度の比較)



### 講師派遣・対象者別にみた受講者数

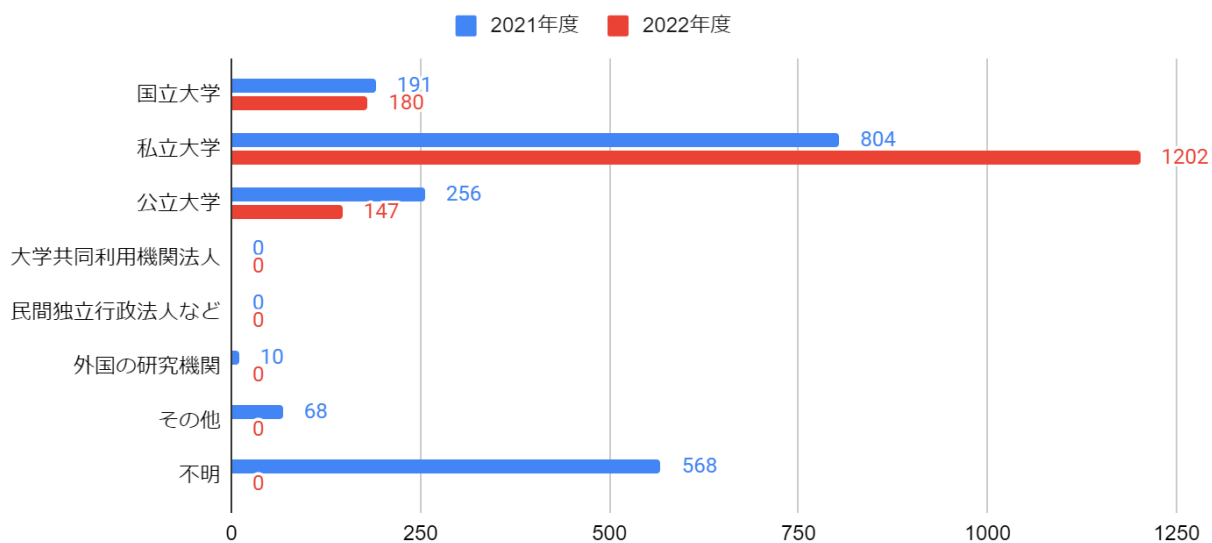


図：対象者別にみた受講者数(2021年度と2022年度の比較)

表2：学校種別による受講者内訳

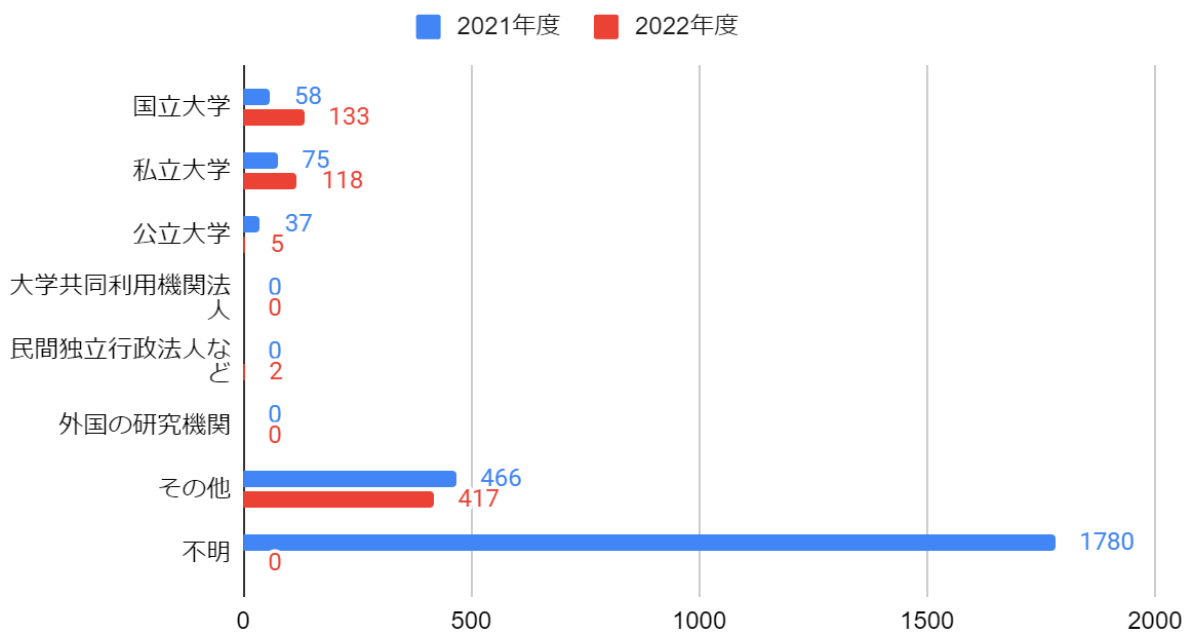
	大学教職員対象 (名)		一般・その他対象 (名)	
	2021年度	2022年度	2021年度	2022年度
国立大学	191	180	58	133
私立大学	804	1202	75	118
公立大学	256	147	37	5
大学共同利用機関法人	0	0	0	0
民間独立行政法人など	0	0	0	2
外国の研究機関	10	0	0	0
その他	68	0	466	417
不明	568	0	1780	0
計	1897	1529	2416	675

## 講師派遣・学校種別にみた受講者数（大学教職員対象）



図：学校種別にみた受講者数（大学教職員対象、2021年度と2022年度の比較）

## 講師派遣・学校種別にみた受講者数（一般・その他）



図：学校種別にみた受講者数（一般・その他対象、2021年度と2022年度の比較）

表3:地域別による受講者内訳

	大学教職員対象 (名)		一般・その他対象 (名)	
	2021年度	2022年度	2021年度	2022年度
北海道	0	50	10	0
東北	61	34	10	0
関東	522	523	125	445
中部	101	348	17	90
近畿	192	174	189	20
中国	2	0	49	0
四国	0	100	15	0
九州	72	0	16	40
海外	1	0	60	0
その他	0	0	0	0
不明	946	300	1925	80
計	1897	1529	2416	675

表4:講師派遣の事例

研修日	講師	研修主催者	研修名	研修場所 (オンラインは同期)
2022/4/23	鈴木克明	国際P2M学会	第33回春季研究発表大会	千葉工業大学＋ オンライン
2022/6/16	鈴木克明	(一社)日本語教育振興協会	「留学生対象の日本語教師 初任者研修」育成研修	オンライン
2022/7/23	鈴木克明	岩手医科大学看護学部	令和4年度第1回FD/SD研 修会	岩手医科大学
2022/8/5、 8/10、8/19 、8/26	平岡斉士・ 小池啓子	愛知県看護研修センター	令和4・5年度愛知県教務主 任養成講習会「ID理論」全4 回 IDを用いて自分の授業を改 善する	オンライン
2022/8/10	鈴木克明	金沢医科大学看護学部	2022年度第1回金沢医科大 学看護学部FD講演会	オンライン
2022/8/17	鈴木克明	北海道医療大学 全学教育 推進センター	2022年度北海道医療大学 全学教育推進センター主催 全学FD委員会共催 FDセミ ナー	オンライン
2022/8/23	平岡斉士・ 小池啓子	静岡県自治体立看護学校 協議会教務担当者研修会	魅力ある授業をめざして インストラクショナルデザイン を活用した授業改善への第 一歩	オンライン

2022/8/26	合田美子	JACET	The 61st JACET International Convention (online, 2022), 特別招待講演	オンライン
2022/8/31	平岡齊士・小池啓子	愛知県立大学	令和4年度愛知県立大学看護学部FD研修会「インストラクショナルデザインを用いた効果・効率・魅力的な授業設計(アドバンス編)」	オンライン
2022/9/5	鈴木克明	日本医療科学大学	2022年度日本医療科学大学FDセミナー	日本医療科学大学
2022/9/15	喜多敏博・平岡齊士	高知大学	学生を主体的な学びに導くオンライン授業 —Moodleを活用した授業デザインと授業外学習の工夫—	オンライン
2022/9/27	合田美子	アルー(株)	シリーズ「企業の未来を担う、Z世代との向き合い方」	オンライン
2022/9/29	鈴木克明	富山大学	富山大学教育推進センター主催第2回全学FD研修会	富山大学
2022/10/5	鈴木克明	東京工科大学	東京工科大学FD講演会	東京工科大学
2022/10/6	鈴木克明	日本私立大学協会	令和4年度大学教務部課長相当者研修会	オンライン
2022/10/18	合田美子	(株)4COLORS	4Colorsオープンwebセミナー	オンライン
2022/11/8	鈴木克明	日本外科感染症学会	第35回 総会学術集会	オンライン
2022/11/17	合田美子	健康科学大学健康科学部FD委員会	健康科学大学FDセミナー	オンライン
2022/12/2	喜多敏博・平岡齊士	大学等環境安全協議会技術分科会	第38回大学等環境安全協議会技術分科会	熊本市国際交流会館
2022/12/13	合田美子	eLC	eLC「オンラインカンファレンス Vol.14」	オンライン
2022/12/16	鈴木克明	横浜国立大学	FD・SD研修会「インストラクショナルデザイン」	オンライン
2022/12/17	合田美子	(株)4COLORS	4Colorsオープンwebセミナー	オンライン
2022/12/17	合田美子	明治国際医療大学FD委員会	令和4年度第3回FD研修会	オンライン
2023/1/26	喜多敏博	東京工業大学教育改革センター	2022年度教育革新シンポジウム	オンライン
2023/1/27	合田美子	(株)4COLORS	4Colorsオープンwebセミナー	オンライン

2023/1/27	鈴木克明	日本福祉大学看護学部	FDセミナー	オンライン
2023/2/1	平岡齊士・ 鈴木真保	大阪大谷大学	教育を合理的に設計するために ーインストラクショナルデザイン入門ー	オンライン
2023/2/24	合田美子	(株)4COLORS	4Colorsオープンwebセミナー	オンライン
2023/2/27	鈴木克明	清泉女子大学	FD研修会	清泉女子大学
2023/3/10	鈴木克明	金沢医科大学看護学部	FD研修会	オンライン
2023/3/10	鈴木克明	京都大学大学院医学研究 科 医学教育・国際化推進 センター	指導医のための医学教育学 プログラム「京大FCME」 (Foundation Course for Medical Education)	京都大学

## 派遣事例1

講師: 合田美子

実施日: 2022年 12月 13日(金)16:00~17:00

場所: オンライン開催

研修名: 日本イーラーニングコンソシアム「オンライン カンファレンス Vol.14」

デザイン、テクノロジー、リサーチから学びの未来をつくる ~米国ミシガン大学アカデミックイノベーションセンターの取り組み

動画: <https://www.elc.or.jp/topics/detail/id=3683>

参加者: 約30名

2022年12月13日にオンラインで開催されたNPO日本イーラーニングコンソシアムの第14回「オンラインカンファレンス」に合田が登壇しました。2021年8月から2022年9月までの長期出張で滞在した米国ミシガン大学でvisiting scholarとして行った活動や研究について紹介しました。ミシガン大学では、アカデミックイノベーションセンターに籍を置き、オンライン教育、MOOCsのビッグデータを分析し、コースデザイン、教材や学習活動と受講者の学習行動について多角的に研究しました。アカデミックイノベーションセンター(<https://ai.umich.edu/>)は、「デザイン、テクノロジー、リサーチから学びの未来をつくる」をミッションとしており、教育工学を活用し、大学の教育だけでなく、新しい教育を創造することを目指しています。

センターには、私が所属していた研究・開発部門の他に、行動科学、教育の公平性と包括性、学習経験デザイン、マーケティングとコミュニケーション、メディアデザイン、オンラインとハイブリッド、オープンオンラインイニシアティブ、営業、ソフトウェア開発、ソフトウェア事業、ユーザーエクスペリエンスデザイン、XRの部門があり、100名を超える研究者が研究と実践を行っています。学際性、多様性を重視し、異なる背景、国籍、専門を持つ研究者が交流し、デザインと研究を通じて、新しい試みを行い、コースやツールなど改善を繰り返してより良い学びを追求しています。また、大学に所属する教職員や学生だけでなく、世界中の研究者や学習者、企業をまきこみ、新しい教育・学びについて議論し、試行錯誤しており、その場に参加させていただくだけでワクワクを感じることができました。

本研修では、私が米国で再発見した「そうだ、教育工学、EdTechはこんなにも創造的なのだ！」と、私が感じた「常に何か生まれそうなワクワクする気持ち」を共有することを目的に発表しました。

## 派遣事例2

講師：平岡齊士・小池啓子

実施日：2022年8月5日、10日、19日、26日

場所：オンライン・対面集合開催

研修名：令和4・5年度愛知県教務主任養成講習会「ID理論」全4回

IDを用いて自分の授業を改善する

参加者：約40名

愛知県看護研修センター主催の愛知県教務主任養成講習教育課程のうち、授業科目「ID理論」（全4回/1単位15時間）を担当しました。各回のテーマは次のとおりでした。

- 1日目(オンライン)：自身の授業設計の問題点を検討し、改善プランを2つ決める
- 2日目(オンライン)：学校全体の授業設計を見直す
- 3日目(オンライン)：ICTを利活用する
- 4日目(対面)：自分の授業・学校の改善プランを立てる

上記の通り、4回中3回はオンラインで実施しました。さらに各回には事前課題を用意しました。受講者はTeams上で課題に取り組み、講師はそれらに対してTeams上でフィードバックを行いました。第1回から第3回はオンラインで実施しました。レクチャーを5－10分程度で行い、それらの内容についてグループワークをすることをルーティンとし、それを繰り返しました。

第4回は対面で実施しました。これまでの取り組みでの生じた疑問などに対する質疑応答を行い、その後、熊本大学教授システム学専攻の修了生でもある小池啓子先生（埼玉医科大学短期大学）から事例紹介をしてもらい、また内容領域専門家として質問に答えていただきました。最後に研修の総まとめとして、各グループの取り組みを他のグループが見て回って質問・コメント・アドバイスなどを行うギャラリーウォークを行いました。

## 講演型FD研修会を脱却するための研修モデルについてのご提案(2021.3)

本センターでは、これまでにFD研修講師派遣を依頼頂いた際に、様々な形の研修を提言してきました。外部講師としての依頼を受け、講演をした後で、質疑応答の時間を最後に取り、という従来型のものもありましたが、他のやり方はどうでしょうか、という提案をした結果、それを受け入れていただき、効果が上がったケースもありました。これまでの経験をもとに類型化した研修モデルには、以下のようなものがありました。

### <外部講師講演型>

重要だと思われるトピックの第一人者を招聘して行うFD。例えば、アクティブラーニング、パフォーマンス評価、オンライン授業など。講師によっては、新しいコンセプトを事例に即して知る機会になることもあるが、力量に依存するので、「お勉強」に留まり実際の授業改善には直結しない場合も散見される。講演の最後には質疑応答の時間を設ける場合もあるが、質問があまり活発に出ずにFD担当者が困るケースも多い。

### <事前質問付外部講師講演型>

外部講師を派遣する際に、事前に質問を受講予定者から募り、その回答を含めた講演にしてもらう。講演時間の半分程度を講演にあて、残りの時間を事前質問への回答にあててもらうのが効果的。ケースによっては、事前質問への回答を最初にしてから、まとめの講演というパターンがより講演を身近に感じられ、満足感を高めることもある。

### <事前資料付講演(反転授業型)>

基本的な内容については事前に論文や講義ビデオで情報を得てもらい、その上で当日の講演に臨んでもらう。可能であれば、事前資料についての質問を事前にあるいは参集時に受付で出してもらう。講演時間は事前資料の内容についての質疑応答を中心に構成するか、ワークショップ的に例えば「事前資料の内容を今後の担当授業にどう応用するか」を検討する時間とする。担当科目でもこの形式(反転授業)を採用してもらう布石として学習者として体験してもらう意図も兼ねて行う。

### <講演型+アクションプラン作成>

次回にアクションプランをどう実現したかをシェアする会を設定・予告し、それまでに活用することに誘う。新しいコンセプトを導入した後で、個人あるいはグループ(担当科目やカリキュラムを共有する者同士)で、このコンセプトをどのように活用して授業を改善できそうかを検討・議論し、アクションプランを作成する(次回のFDまで、今年度中、2-3年後までには、など)。

### <事前課題+アクションプラン作成>

FD開始前に授業改善のヒントとなるような文章を全員が読んで、疑問点や自分の授業改善にどのように活用できそうかを検討した結果を持ち寄ってもらう方式。集まった時には疑問点を解消した後で、各自の検討結果を共有し、互いに気づいてなかった点を加えてアクションプランを作成して、次回につなげる。

### <まな板の鯉方式>

これまでに様々な工夫をして授業改善に取り組んできた教員の事例を紹介してもらい、自分の授業で参考になる点(まねできそうな点)や更なる改善アイデアについて小グループで話し合い、授業提供者が持ち帰るお土産とする。例えば、ICT活用法、遠隔授業構成法、学習意欲を高める方策などのテーマを設定し、関連する工夫を数例並べて検討するとさらに効果が高まる。



#### <ワークシート形式>

各自が担当する授業について共通のフォーマットを用いて現状分析し、改善の糸口を見つける方式。ARCSで学習意欲を向上する、大学の授業点検シートで出入口と方略をチェックするなど。ワークシートへの記入を事前課題として記入済みのものを持ち寄って議論中心に展開すると効率的になる。さらにアクションプラン作成と組み合わせて次回につなげることも効果的。代表的な取り組みを次にまな板の鯉方式で共有することにつなげる前段階としての活用するのもよい。

#### <他のやり方>

本センターでは、講師派遣に際して、その他にも有効だと思われるやり方を模索していきたいと考えています。遠慮なくご相談ください。

# 共同利用拠点事業⑤ オンラインプログラム

本センターでは2019年から、  
授業設計について学習するオンラインプログラム  
「教育改善スキル修得オンラインプログラム」  
を公開しています。

## 本年度の取り組みの概要

本取り組みでは、高等教育機関の授業における学習目標、評価方法、授業方法の設計に関する知識・スキルを身につけるためのオンラインプログラム(科目デザイン編)の運営を行っています。

基礎からの積み上げ方式による暗記から始まる専門家育成の枠組みを脱却し、学修の有用性が最初から感じられる科目デザインを実現することが社会人の学び直しにも有効であり、かつ社会人経験がない学生にとっても有用であることを前提としています。

本年度は有料版の第6期と第7期を募集し、現在、3名の参加者が3月の修了を目指して学習を進めています。

教育改善スキル修得オンラインプログラム(科目デザイン編)  
<https://kyoten1.cica.jp/moodle/>

The screenshot shows the Moodle interface for the course. At the top right, there are language and login options. The main header reads '教育改善スキル修得オンラインプログラム (科目デザイン編)'. Below this is an 'ANNOUNCEMENTS' section. The 'ホーム画面' (Home Page) section contains four modules, each with a description and an 'アクセスする' (Access) button. The 'ナビゲーション' (Navigation) sidebar on the right includes buttons for 'ホーム画面へ戻る', '進捗管理画面へ戻る', and two options for '学習状況証明書を発行' (Issue Certificate of Learning Status), one for free users and one for paid users. At the bottom right, there is a 'ご意見はこちら' (Contact Us) section.

図:教育改善スキル修得オンラインプログラム(科目デザイン編)トップ画面

## プログラムの学習内容(有料版と無料版)

オンラインプログラムでは、大学の授業設計について、主に学習目標、評価方法、授業方法の3点から学習し、学習した内容を元に、自身が所属機関で担当している授業を修正します。また、ミネルバ大学の事例等を紹介し、今後の大学についての考え方についても議論します。

無料版の学習者は各モジュールで知識を学習、自身が学習したことを身につけることができたのかを確認するクイズを受験することができます。

一方、有料版学習者に対しては、無料版の範囲に加え、自身の担当科目の修正案に関する他の学習者とのディスカッション、教員による添削が受けられる課題提出まで提供されます。また、有料版学習者に対しては2回の対面学習が開催され、各対面学習では学習者がモジュールを学習しているときに感じた疑問点を共有、議論する機会を設けています。

各モジュールで学習しながら自身の担当科目を修正することで、本プログラムの修了後、すぐに改善した状態の自身の科目を実施できるようにしています。

表:各モジュールの対象者及び内容

モジュール名	対象者	内容
モジュール1 大学教育に関する5つの物語	無料版 有料版	高等教育に関する5つの物語を紹介し、次世代の大学についての考え方を説明します。これまでの大学の常識を改めて見直し、新しい大学のイメージについて議論します。
モジュール2 認知的発達を促す授業方法	無料版 有料版	『パラレルセッション』や『一人でできることは授業ではやらない』といった学習者の認知的発達を踏まえた支援について学習します。
モジュール3 評価と単位認定の見直し	無料版 有料版	期末テストの成績が悪い、実技の授業をどのように評価すればよいのかといった評価に関する問題について学習します。
モジュール4 学習目標の高度化	無料版 有料版	『暗記ではなく知識の応用を目指す』や『学問領域に依存しない学び方を学ぶ』といった学習目標に関する問題について学習します。
モジュール5 最終課題	有料版	モジュール1からモジュール4で学習したことを振り返り、自身の科目を修正します。

## アクセス数

2022年4月から2023年3月までの間にオンラインプログラム(科目デザイン編)へアクセスした訪問者数(IPアドレス)および、無料版プログラムの学習を修了しデジタルバッジを取得した学習者の数は以下の通りです。

モジュール名	訪問者数(IPアドレス)		無料版プログラム: デジタルバッジ取得者数	
	2021	2022	2021	2022
モジュール1: 大学教育に関する5つの物語	343	304	22名	12名
モジュール2: 認知的発達を促す授業方法	103	38	13名	5名
モジュール3: 評価と単位認定の見直し	53	23	15名	6名
モジュール4: 学習目標の高度化	60	22	12名	4名

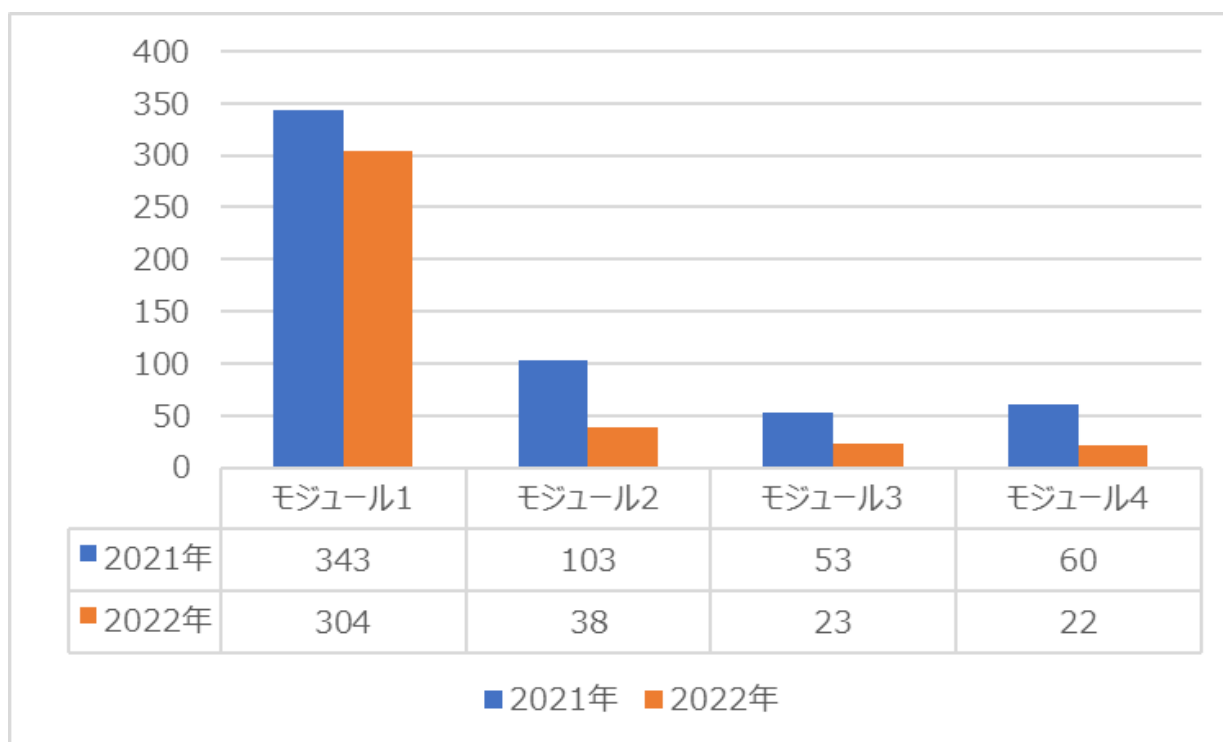


図: 科目デザイン編へのアクセス数(IPアドレス)の比較(2021年度—2022年度)

## 有料版プログラム

有料版では、各モジュールでの学習を進めながら、実際に所属機関で担当している科目(大学院生の場合は将来担当したい科目)を改善していきます。有料版プログラムには以下の特徴があります。

### <特徴1:相互レビューに基づく学習>

本プログラムでは各モジュールで提出する課題等はすべて、他の学習者との相互レビューを行いながら、質の改善を行っています。

### <特徴2:ポートフォリオの活用>

本プログラムでは、各モジュールで提出する課題や自身の科目のシラバス等をポートフォリオにまとめるお手伝いをしています。そのポートフォリオを相互レビューや対面ワークショップ等で他の学習者と共有します。最終的にはポートフォリオを誰でも閲覧可能な形で公開できるようにして、発行される履修証明書と併せて、学習者自身のキャリアアピール等で活用していただくことを想定しています(公開は任意)。

### <発行される証明書>

本プログラムでは、すべての学習を完了し、最終期限日までに合格することで文部科学省の制度に基づいて熊本大学から履修証明書(紙媒体・デジタル媒体)が発行されます。学習途中でも(無料版でも)学習状況証明書(デジタル媒体)が発行されますが、これは文部科学省の履修証明制度に基づくものではありません。

また、履修証明書(デジタル媒体)には任意で本プログラムで作成を支援するポートフォリオへのリンクを埋め込むことができ、将来、自身の学習についてアピールする際に活用することができます。

**修了証明書**

デジタルバッジ一覧とポートフォリオ

氏名： 長岡千香子

本センターが学校教育法第105条に基づいて提供した履修証明プログラム  
「教育改善スキル修得オンラインプログラム(科目デザイン編)」(計60時間)  
第1期(2019年12月から2020年3月)  
を履修し、合格要件をすべて満たしたことを証する。

モジュール1  
大学教育に関する5つの物語



モジュール2  
認知的発達を促す授業方法



モジュール3  
評価と単位制度の見直し



モジュール5  
最終課題



モジュール4  
学習目標の高度化



デジタルバッジをクリックすると、各モジュールの詳細な学習活動を確認できます。

[▶ ポートフォリオはこちら](#)

2020年3月31日 公印省略  
熊本大学 システム学研究センター

図: 履修証明書(デジタル版)

## 受講後アンケート調査の結果

教育改善スキル修得オンラインプログラム 科目デザイン編(第5期)の受講後アンケート(修了者3名のうち3名(バッジ取得者のうち100%))では、以下、1)~5)の設問に対する回答を求めました。

1)各モジュールでの説明、クイズ等で何か改善してほしい点があれば教えてください。

「各アイデアの内容・必要性・使い方などについては疑問はないが、クイズやテストとして一問一答の答えを出す際には、コミットとオリジナリティは、区別がつかないクイズがありもやもやする部分がありました」、「このモジュール2で提案されている「努力と真剣さを要求する」のアイデアについては、いくつかのテストで「努力」や「真剣さ」についての定義や解釈が様々で、理解すること・納得することが難しいように思いました」など、モジュール2と4の力試しテストに関する回答が多く見られました。これらの意見を踏まえ、力試しテストの修正に取り掛かりました。すでに修正作業は完了していますが、現在、学習を進行している受講者の意見を確認後、今後の修正の要否について検討します。

2)学習を促すメールとして各キックオフミーティングや対面学習の前に学習を促すメールを配信しました。これらはあなたの学習進捗にとって役に立ちましたか？

3名中、3名の回答者が「役に立った」と回答し、その理由として、「リマインドメールをお送りいただいたことで、やらないとマズイ!と、奮起して取り組むことができました」、「ペースの確認をするうえで大変役に立ちました」、「本研修以外の業務に追われ、後回しになることが多かったので、事前に伝えていただける点はとても助かりました」等の回答を得ました。

3)修了証明書(電子版)は今後、どのような目的で利用しますか？

3名中、3名の回答者が「将来、就職先等に提示することで自身の学びをアピールする」、「自身の学びを振り返るために利用する」、「研究費獲得などの際の実績として記載する」目的で修了証明書(電子版)を利用すると回答しました。

4)ポートフォリオの利用目的を教えてください。

3名中、3名の回答者が「将来、就職先等に提示することで自身の学びをアピールする」、「自身の学びを振り返るために利用する」目的でポートフォリオを利用すると回答しました。

5)本プログラムの学習で身についたと感じた知識・スキルと感じたものがあれば教えてください。

本プログラムの学習を通し、受講者がどのような知識・スキルが身についたと感じているのか、その一部を紹介します。

独学でインストラクショナルデザイン(ID)を学習してきたため、IDというものの基本的な考え方とその活用方法が身についた(学ぶことができた)と感じました。

担当する授業については、「学生の将来に有益なものとなるように」と願っているいろいろと試行錯誤するものの、これまで、その「手応え」はありませんでした。今回、本講座で「授業改善スキル」を学んだことで、「学生にとって有益な授業とは」について深く考察し、効率的な授業を設計するための具体的なスキルが向上したように思います。

全体を通してIDの活用法についての理解が深まることで、私が研究としても取り組んでいる、楽しく授業を行うために、教育のゲーミフィケーションをより適切に活用できるようになったとも感じている



し、看護という医療を学ぶ場においてゲームの要素を用いることは抵抗を感じる方々も多いが、その点についても論理的に周囲へ説明できるようになったと感じている。

キャリアと同様の回答となるが、モジュール1「教えない教員と自ら学ぶ学生」が重要であると感じており、これをかなえるためにモジュール2～4の手法を用いるという認識を持つことで、成長できたと感じている。

## 6ヶ月後追跡調査の結果(有料版)

教育改善スキル修得オンラインプログラム 科目デザイン編(第4期・5期)の修了者を対象とした6ヶ月後追跡調査(修了者5名のうち2名(バッジ取得者のうち40%)では、オンラインプログラムの内容をどの程度覚えているか(記憶度)、また受講後の業務にどの程度役立っているか(有益度)についての回答を求めました。記憶度・有益度について、モジュール1～4の全ての項目で「覚えている」「少し覚えている」、「役立っている」、「少し役立っている」と回答し、記憶度・有益度ともに、「覚えていない」「役にたっていない」と回答された項目はありませんでした。

### ＜6ヶ月後追跡調査結果概要(2022年4月(第4期)、2022年9月(第5期)実施分＞

最終レポートで作成したアクションプランを計画通り実行したか回答を求めた結果、1ヶ月の計画では、2名中1名の受講者が具体的なアクションを実行していたが、3ヶ月、6ヶ月では2名とも計画を実践できなかったと回答しました。行動に移せなかった理由を見てみると、「看護アセスメントの方法について、限られた時間で多くのことを理解してもらうために結局教員が説明してしまっていた」、「個人・グループ・個人、相互レビュー、パラレルセッションは実施したが、しゃべるのは1割までと複数の視点から分析は時間が足りずできなかった」のように、時間の制限による予定変更が理由として挙げられていました。また、オンラインプログラムで学んだことをもとに、自分が従事する教育事例の改善に取り組んだか回答を求めた結果、全ての受講者が「はい」と回答しました。以下、アクションプランの実行状況とIDを活用した教育改善への取組状況、そして、具体的にどのような取り組みをされて、どのような成果を収めたのか、その一部を紹介します。

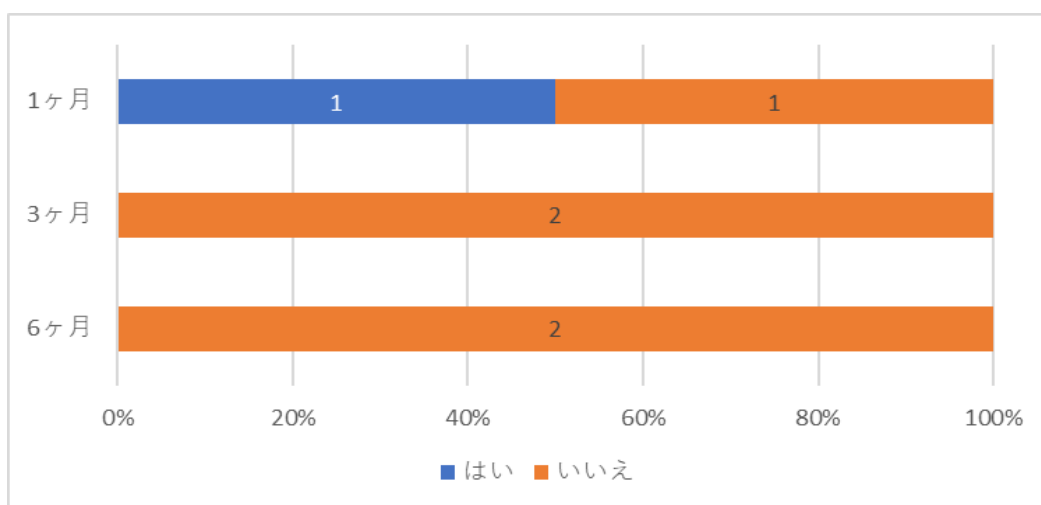


図:アクションプランの実行状況 (n=2)

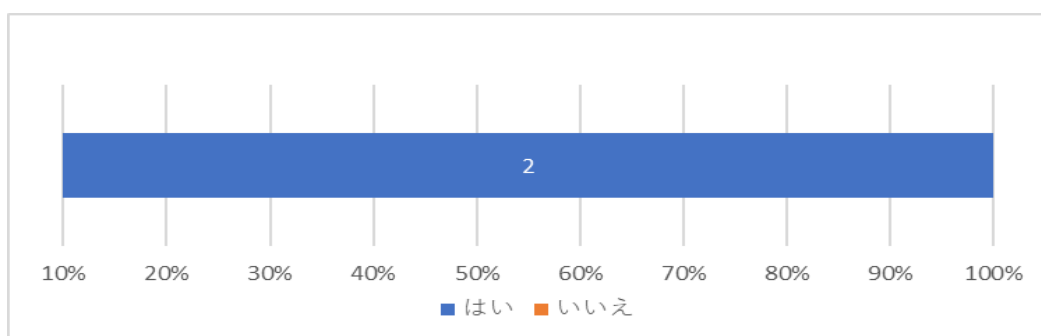


図:IDを活用した教育改善への取組状況 (n=2)

表:6ヶ月追跡調査によって報告された取り組み事例とその成果

改善内容	改善結果	周りからの反応
<p>今まで授業内で説明していた内容を事前に動画視聴し、事前学習をしてもらうこと、技術チェックリストを作成使用することで、ポイントを明確にすること。それをみて学生が自己学習できるように改善しました。また、コロナウィルス感染症予防のため、対面ディスカッションが制限されている中、LMS 掲示板を活用することで学生同士が相互学習を実施することにとり組みました。</p>	<p>評価配点が前年度と変わっているため、成績について単純に比較はできないが、技術のポイントが分かりやすかった、もっと練習して実際に実習で実践できるようになりたいなどのコメントをもらった。LMS掲示板でディスカッションしたことで、メンバーの考えがとても参考になった等のコメントもあった。</p>	<p>異なる領域の教員から、工夫しているねと声をかけられたが、具体的にどうしているのかまでは聞かれなかった。同じ領域内の教員とは、手ごたえを感じているため、次年度はもっと精錬するために準備を早めに始めることを確認し合った。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・大きく3ブロックに分かれて実施していた講義の順序を入れ替え、前提条件と後続ブロックの演習内容にどのようなつながっているかを明示した。</li> <li>・一部の演習科目ではあるが、前提条件と事前課題を明示しそれを受講条件とすることで、前提知識の確認を無くし、教員の発言を減らし演習時間を多く確保した。</li> <li>・ICTやグループワークの活用により、待ち時間やただ話を聞いている時間を減らすようにした</li> <li>・期末試験をやめ、各演習項目やブロック毎での技術テストやレポートなどに変更し、基準に満たないものは、再提出可能とした。</li> <li>・演習の実技事前テスト事後テストを導入することで、演習目標の達成を評価できるようにした。</li> <li>・グループ学習の評価対象を個人課題の割合を大きくすることで、フリーライダー予防に取り組んだ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前提条件を事前学習として授業の受講条件とすることで、演習時間を多く確保でき、授業時間内に実技チェックまでできることで定期試験を無くすことにつながった。</li> <li>・実技チェックを授業前後で行うことで、教員が学習目標を正しく評価できるだけでなく、学生自身が自己の成長を実感できたこと。</li> <li>・グループ学習の評価を個人提出物への割合を多く(7割)としたことで、フリーライダーの抑制には一定の効果が得られた(全員が個人課題のための学習を行う)が、グループ学習での協力度合いには差があり(個人学習はやるが、グループワークは手を抜くなど)、しっかりとグループ学習を行っている学生の不平不満の解消まではたどり着けなかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いままでは実施の提案をうまく行うことができなかったが、本研修を受講することで論理的に説明を行え、上司に実施変更の許可を得ることができた。</li> <li>・同僚からは、「去年より学生が楽しそうだし、集中できているよね」との発言もあり、改善した授業実践による学生の反応をみてIDを用いた授業実践の効果を体感してもらえたようである。</li> </ul>

## 6ヶ月後追跡調査の結果(無料版)

教育改善スキル修得オンラインプログラム 科目デザイン編の無料版受講者を対象とした6ヶ月後追跡調査(アンケート対象者48名のうち4名)では、「このプログラムを同僚や後輩等、周りに進めたい」の設問に対し、すべての回答者が「とてもそう思う」、「ややそう思う」と回答しました。また、「今後、類似した問題に直面した時の解決の手がかりがつかめた」、「今後、自律学修支援編の受講も考えている」の設問では、すべての回答者が「とてもそう思う」、「ややそう思う」と回答し、肯定的な反応を示しました。更に、「今後、自身の教育改善のため、本プログラムで得た成果を活用するつもりだ」の設問に対しても、すべての回答者が「とてもそう思う」、「ややそう思う」と回答し、肯定的な反応を示しました。以下、1)～3)の設問に対する回答は以下の通りです。

1)各モジュールでの説明、クイズ等で何か改善してほしい点があれば教えてください。

「クイズで問うていることが学習の到達度を問うものではないと感じることが多々ありました」、「いくつかの選択肢でよく間違っていたので、自身の理解が正しいか、自信が無い部分がある(手法の適応が正しいかという設問)」など、クイズや力試しテストに関する回答が多く見られました。これらの意見を踏まえ、力試しテストの修正に取り掛かりました。すでに修正作業は完了していますが、現在、学習を進行している受講者の意見を確認後、今後の修正の要否について検討します。

2)受講目的のうち達成したと感じられるものとその理由について教えてください。

受講者全員が、「自身が受け持つ科目改善のため」、「自身のキャリアのため」、「業務の関係上、必要だったため」にオンラインプログラムを受講し、それらが達成されたと回答しました。その理由として、「FD担当だったので、FDコンテンツを検討する上で役立ちました」、「生徒の学びを促進させる考え方を学ぶことができ、今後カリキュラム設計に役立ちそうだから」、「現在完全オンライン、チューターレスで実施しているが、複数人で課題に取り組んでいる結果、フリーライドの問題や、評価の問題が多かった。今回の受講で、3コマあたりで区切って実技試験を入れるべきだという発想に至った」等の回答を得ました。

3)オンラインプログラムについて、どのような印象を持ちましたか？

オンラインプログラムの印象について、ARCSモデルの各要素別に1～7段階で回答を求めました。

【A:注意】回答者全員が肯定的な回答を行い、その理由として、「授業と関連付けて考えることができました」、「IDの概念に初めて出会い、これまでの教職経験で感じてきたことが理論づけられていくようであったため」、「自身の専門である医学の教育に限らず、広いテーマでもIDが通用することがわかった」等の回答を得ました。

【R:関連性】回答者全員が肯定的な回答を行い、その理由として、「深く考えさせられる講義とテストだった」、「自身が担当するカリキュラムの不備を改善する方法が提示されていた」、「授業で取り扱った内容が、自分の仕事内容と関連した事例が多く、常に自分目線に置き換えることができたので、やりがいがあった」等の回答を得ました。一方で、「教材はいいのですが、テスト(クイズ?)の作りが正当に内容を評価するものか、疑問に思うことがありました」との意見があったため、力試しテストの修正に取り掛かりました。

【C:自信】5名中4名の回答者が肯定的な回答を行い、その理由として、「難易度がちょうどよかったです」、「この授業を通して、自分の仕事内容を内省し今一度何か改善できることはないか、また何か学んだ理論を取り入れることはできないか、を考える癖がついた」等の回答を得ました。一方

で、「いくつかの選択肢でよく間違ってしまったので、自身の理解が正しいか、自信が無い部分がある」等の意見があったため、力試しテストの修正に取り掛かりました。

【S:満足感】回答者全員が肯定的な回答を行い、その理由として、「授業設計だけでなく学習指導について考えが深まったため」、「IDについて、個別の道具ではなく、どのように使うのかということが学べたと思う」、「自分の仕事内容を自己修正するノウハウも身についたし、学習してよかった」等の回答を得ました。一方で、「よかったのですが、先述したようにテストの作りにやや疑問が残りました」との意見があったため、力試しテストの修正に取り掛かりました。

#### ＜6ヶ月後追跡調査結果概要(2022年4月、2022年9月実施分)＞

オンラインプログラムで学んだことをもとに、自分が従事する教育事例の改善に取り組んだか回答を求めた結果、4名中3名の受講者が「はい」と回答しました。以下、アクションプランの実行状況とIDを活用した教育改善への取組状況、そして、具体的にどのような取り組みをされて、どのような成果を収めたのか、その一部を紹介します。

表:6ヶ月追跡調査によって報告された取り組み事例とその成果

改善内容	改善結果	周りからの反応
シラバス作成の際、目標と評価に齟齬がないようにより意識するようになり、学生の主体性を評価することを念頭に置いたルーブリックなどを作りました。	授業で何が目指されていて、何を求められているかを認識する学生が増えた気がします。	FDで話す機会があり、それなりに好評だったと思います。
「モジュール2」で学んだ「パラレルセッション」を実施しました。日本語学科3年生30人(×3クラス分)「スピーチとディベート」の授業で「自己紹介」を行いました。これまでの私は、一人ずつ自己紹介を教壇の前に上がらせ、何回かの授業に分けて発表させていました。ですが「パラレルセッション」というやり方を学び、クラスを3グループに分け、各10分3セットで、1グループが教室に散らばり自己紹介を行い、他2グループが各々好きなところに聞きに行き、発表の評価及び自己紹介の内容に関する質問をするポスター形式で行いました。	学生にこのポスター形式での自己紹介を説明し、理解してもらうのがとても大変でした。ですが、学生に実際に動いてもらい1回目の自己紹介を行い、私もフォローしていくうちに段々やり方を理解したようで、楽しそうに取り組んでくれました。 これまでの教壇に立っての自己紹介よりもずっと傾聴者と発表者とのやり取りが多く、日本語を話す機会も増え、活発なアクティビティになりました。	お互いの授業について干渉し合わないのが中国の常識のようで、私も自分の授業について共有したことがほとんどないので、反応は分かりません。。

## 「自律学修支援編」の有料版運用開始

履修証明制度による講座提供を開始した「科目デザイン編」の続編として、「自律学習支援編」の提供を開始しました。大学生の自律的な学びを支援するために授業にどのような要素を盛り込むことができるかについて、様々なICT活用のヒントを提供するとともに、『学習設計マニュアル』を教員の立場から読み進めていくというコンセプトで整備を進めてきました。令和2年度に無料版を公開し、本年度は、有料版第2期を募集し、3名の方が修了されました。

教育改善スキル修得オンラインプログラム(自律学習支援編)

<https://kyoten1.cica.jp/moodle2/>

The screenshot shows the homepage of the 'Education Improvement Skills Acquisition Online Program (Autonomous Learning Support Edition)'. The page is in Japanese and features a dark green header with the program title. A navigation menu on the right includes links for 'Home', 'Progress Management', 'Learning Status Certificate Issuance (Free User)', and 'Learning Status Certificate Issuance (Paid User)'. The main content area is divided into four modules, each with a description and an 'Access' button. The first module is 'Module 1: Students create their own learning and direction'. The second is 'Module 2: Promote self-learning with ICT'. The third is 'Module 3: Students find their own learning environment'. The fourth is 'Module 4: Raising students as self-adjusting learners'. A footer section includes 'Related Sites' and 'Your Opinion Here'.

日本語 (ja) ログイン

### 教育改善スキル修得オンラインプログラム (自律学習支援編)

#### ナビゲーション

- ホーム画面へ戻る
- 進捗管理画面へ戻る
- 学習状況証明書を発行 (無料ユーザー向け) 証明書はいつでも発行可能
- 学習状況証明書を発行 (有料ユーザー向け) 有料ユーザーのみアクセス可能です。

#### ホーム画面

初めてアクセスされた方へ

本教材へようこそ。まず、右のボタンをクリックして、このプログラムの学習の進め方を一緒に確認しましょう。

学習の進め方

#### モジュール 1：学生が自分の学びと向き合うきっかけをつくる

モジュール1では、学生の自律学習を支援するための第一歩として、学生に自分の学びと向き合うきっかけをつくるための7つの提案をします。「大学での学び方」を教えるために、「自分の科目で何ができそうか」を考えてみましょう。

アクセスする  
要ログイン

\*旧モジュール1「大学教育に関する5つの物語」はこちら

#### モジュール 2：自学自習を促すICT活用

モジュール2では、学習者に自学自習を促すためにICTで何ができるのか、その手段を学び、実際にICTを導入した授業設計ができるように学びます。

アクセスする  
要ログイン

#### モジュール 3：学生が学び合う場をつくる

モジュール3では学習者に学びの場を提供するアイデアを学び、それを取り入れた授業設計ができるように学習します。

アクセスする  
要ログイン

#### モジュール 4：学生を自己調整学習者に育てる

モジュール4では、学習スキルのノウハウを学び、学習者に対し、そのスキルを学ばせる機会を授業内でどのように提供していくか設計できるように学びます。

アクセスする  
要ログイン

#### 関連サイト

本プログラムは、熊本大学教授システム学研究センターが運営しています。

RCiS 教授システム学研究センター  
Research Center for Instructional Systems

熊本大学大学院 Graduate School of Educational Sciences  
社会文化科学研究科 教授システム学専攻

#### ご意見はこちら

図:教育改善スキル修得オンラインプログラム(自律学修支援編)トップ画面

## プログラムの学習内容(有料版と無料版)

科目デザイン編同様、無料版の学習者は各モジュールで知識を学習、自身が学習したことを身につけることができたのかを確認するクイズを受験することができます。

一方、有料版学習者に対しては、無料版の範囲に加え、自身の担当科目の修正案に関する他の学習者とのディスカッション、教員による添削が受けられる課題提出まで提供されます。また、有料版学習者に対しては2回の対面学習が開催され、各対面学習では学習者がモジュールを学習しているときに感じた疑問点を共有、議論する機会を設けています。

各モジュールで学習しながら自身の担当科目を修正することで、本プログラムの修了後、すぐに改善した状態の自身の科目を実施できるようにしています。

表:各モジュールの対象者及び内容

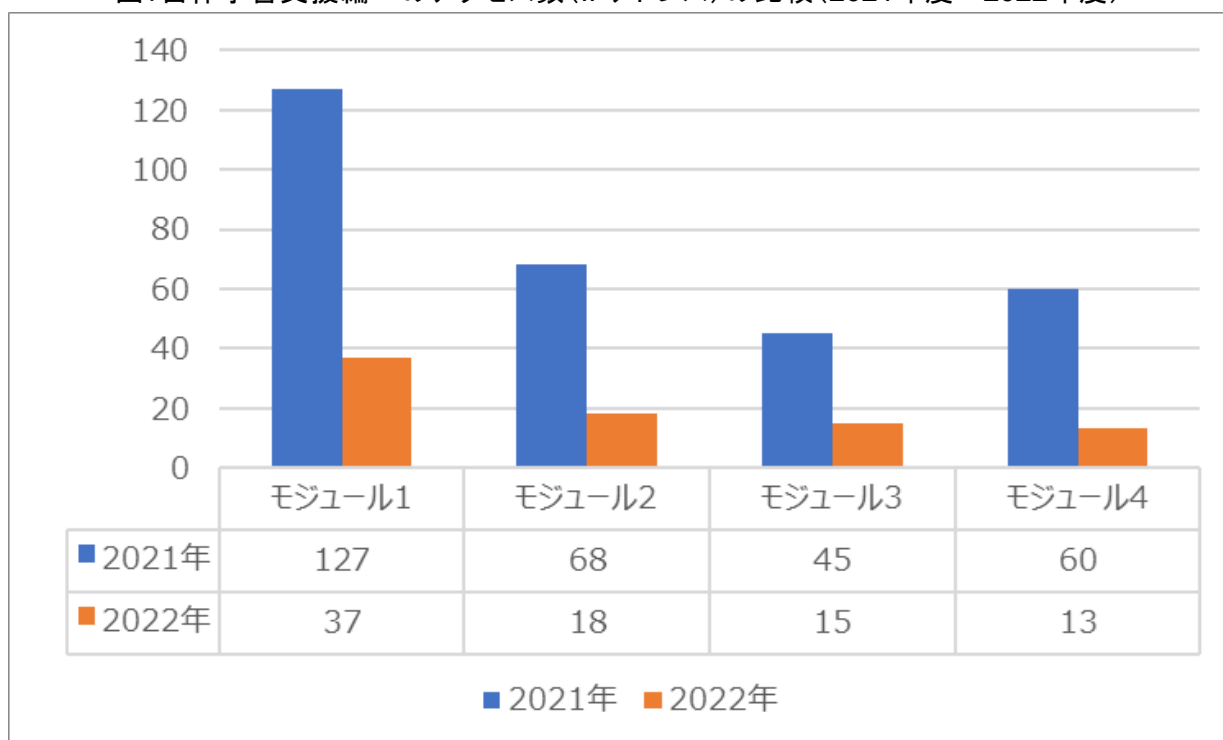
モジュール名	対象者	内容
モジュール1 学生が自分の学びと向き合う きっかけをつくる	無料版 有料版	学生の自律学習を支援するための第一歩として、学生に自分の学びと向き合うきっかけをつくるための7つの提案をします。「大学での学び方」を教えるために、「自分の科目で何ができそうか」を考えてみます。
モジュール2 自学自習を促すICT活用	無料版 有料版	学習者に自学自習を促すためにICTで何ができるのか、その手段を学び、実際にICTを導入した授業設計ができるように学びます。
モジュール3 学びの場を作る(学びの場の提供)	無料版 有料版	学習者に学びの場を提供するアイデアを学び、それを取り入れた授業設計ができるように学習します。
モジュール4 学生を自己調整学習者に育てる	無料版 有料版	学習スキルのノウハウを学び、学習者に対し、そのスキルを学ばせる機会を授業内でどのように提供していくのか設計できるように学びます。
モジュール5 最終課題	有料版	モジュール1からモジュール4で学習したことを振り返り、自身の科目を修正します。

## アクセス数

2022年4月から2023年3月までの間にオンラインプログラム(自律学修支援編)へアクセスした訪問者数および、無料版プログラムの学習を修了しデジタルバッジを取得した学習者の数は以下の通りです。

モジュール名	訪問者数		無料版プログラム: デジタルバッジ取得者数	
	2021	2022	2021	2022
モジュール1 学生が自分の学びと向き合う きっかけをつくる	127	37	11名	3名
モジュール2 自学自習を促すICT活用	68	18	11名	3名
モジュール3 学びの場を作る(学びの場の提供)	45	15	12名	3名
モジュール4 学生を自己調整学習者に育てる	60	13	12名	3名

図: 自律学習支援編へのアクセス数(IPアドレス)の比較(2021年度ー2022年度)





## 受講後アンケート調査の結果

教育改善スキル修得オンラインプログラム 自律学習支援編(第2期)の受講直後アンケート(修了者3名のうち2名(バッジ取得者のうち67%))では、以下、1)~4)の設問に対する回答を求めました。

1)各モジュールの学習内容について、何か改善してほしい点があれば教えてください。

「モジュール1は特に各アイデアの区分けが難しく、力試しテストはかなり苦戦しました」、「アイデアを利用しているが適切ではない、と利用していないの定義が時折不明瞭であり、説明を聞くと納得できることもあるが、これは利用しているのではないか?と思う場面もあった」など、モジュール1、3、4の力試しテストに関する回答が多く見られました。これらの意見を踏まえ、今後、力試しテストと複合練習問題の修正作業を検討します。

2)学習を促すメールとして各キックオフミーティングや対面学習の前に学習を促すメールを配信しました。これらはあなたの学習の進捗に役に立ちましたか?

回答者全員が「役に立った」と回答し、その理由として、「提出した気分になっていたため、未提出であることを知らせていただき助かりました」、「日常の中でどうしてもモジュールを進めるのが遅くなるのでリマインドとして助かりました」等の回答を得ました。

3)他にどのようなサポートがあれば、より学習を進めやすくなると感じましたか?

「丁寧にサポートいただきました」という回答があった一方で、「力試しでかなりの時間を要するので、不合格の際に、その内容を説明し、妥当であれば再チャレンジできる仕組みがあれば、安心して学習できると思いました」の回答を得ました。これらの意見を踏まえ、今後、力試しテスト不合格者に対する支援を強化していきます。

4)オンラインプログラムについて、どのような印象を持ちましたか?

オンラインプログラムの印象について、ARCSモデルの各要素別に1~7段階で回答を求めました。

**【A:注意】**回答者全員が肯定的な回答を行い、その理由として、「科目デザイン編を経て教員としての価値観が変わってきたと自覚しているものの、さらにまだまだ先入観にとらわれている部分に気付かされるため」、「書籍を読んでもなかなか理解、実践の段階に至っていなかったので、オンラインで学べることで興味が増した」との回答を得ました。

**【R:関連性】**回答者全員が肯定的な回答を行い、その理由として、「科目デザイン編でも十分に授業改善を行えたと思っていたが、まだまだ考えるべきことや改善すべき事象、使えるアイデアがたくさんあることに気付けた」、「自分自身が学びたかったテーマであり、もともと無料版を受講予定であった。大学での授業の在り方に悩んでいた」との回答を得ました。

**【C:自信】**回答者全員が肯定的な回答を行いましたが、他の項目に比べると、数値が高くありませんでした。その理由として、「努力はしているが点数が取れないと感じる部分があるので、不合格の問題は、間違った理由を提出しその理由が妥当であった場合は再チャレンジできるなどの仕組みが欲しい」、「後半のモジュールは力試しテストなどがボロボロでまだ理解が不十分だと感じている。実際の場面で練習しなければならないと感じている」等の回答を得ました。

**【S:満足感】**回答者全員が肯定的な回答を行い、その理由として、「一度学習設計マニュアルは読んでいたものの、本プログラムに参加することで考えが及んでいなかった点や、見落としていた点に気付け授業改善に取り組めた」、「学習したこと自体は間違いなくよかった。その中で、自分自身

が十分に時間が取れなかったことが心残りであったが、鈴木先生を始め議論をする機会を得て、文字通り目からうろこが落ちるような思いであった」等の回答を得ました。

## 6ヶ月後追跡調査の結果(有料版)

教育改善スキル修得オンラインプログラム 科目デザイン編(第1期)の修了者を対象とした6ヶ月後追跡調査(修了者8名のうち6名(バッジ取得者のうち75%)では、オンラインプログラムの内容をどの程度覚えているか(記憶度)、また受講後の業務にどの程度役立っているか(有益度)についての回答を求めました。記憶度・有益度について、多くの受講者がモジュール1～5の項目で「覚えている」「少し覚えている」、「役立っている」、「少し役立っている」と回答し、記憶度・有益度ともに、「覚えていない」「役にたっていない」という回答が過半数をこえた項目はありませんでした。

### <6ヶ月後追跡調査結果概要(2022年9月(第1期)実施分)>

最終レポートで作成したアクションプランを計画通り実行したか回答を求めた結果、1ヶ月の計画では、6名中4名の受講者が具体的なアクションを実行していたが、3ヶ月では2名、6ヶ月では全員が計画を実践できなかったと回答しました。行動に移せなかった理由を見てみると、「職場の異動があったため」、「本研修で得たことや本研修の設計をもとに、本学FD活動として教員間の議論を促していきかけたが、自分の授業対応を優先してしまい、まだ具体化できていない」のように、職場での異動や予定変更が理由として挙げられていました。一方で、「同僚からの意見や専門家の意見をいただけていないので、今月実施予定」、「授業改善を実施する予定(10月)」など、これから計画を実行するという回答も多数見られました。また、オンラインプログラムで学んだことをもとに、自分が従事する教育事例の改善に取り組んだか回答を求めた結果、全ての受講者が「はい」と回答しました。以下、アクションプランの実行状況とIDを活用した教育改善への取組状況、そして、具体的にどのような取り組みをされて、どのような成果を収めたのか、その一部を紹介します。

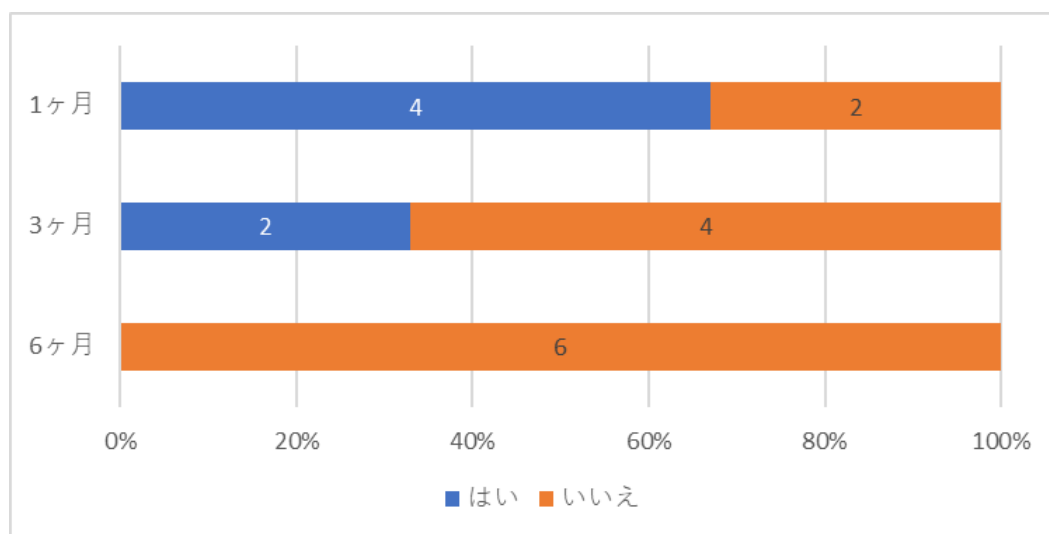


図:アクションプランの実行状況 (n=6)

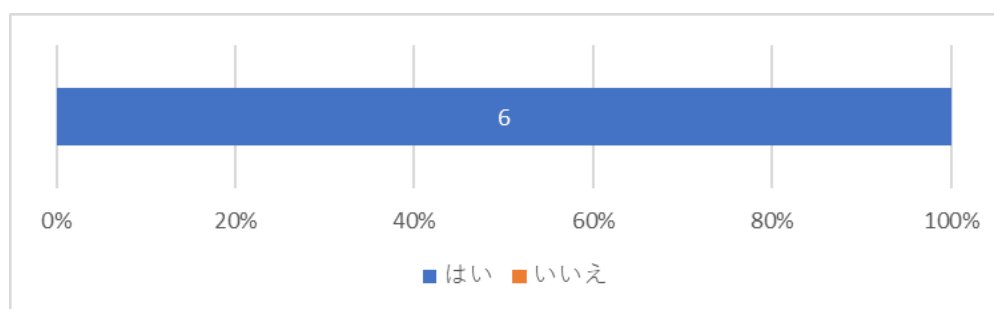


図:IDを活用した教育改善への取組状況 (n=6)

表:6ヶ月追跡調査によって報告された取り組み事例とその成果

改善内容	改善結果	周りからの反応
4月に講義になったので、できることが取り入れてみた。学生は小テストから、その後、どのように取り組むと単位修得できるか自主的に相談するように変化していた。	積極的に取り組む学生が増えた。	周りに自分の取り組みを提案してみたが、賛同を得られなかったので、自分の授業で実践中である。やりたいけどやれないという教員が多かった。
①自立学習を促すために講義動画を作成(モジュール2:ICT活用) ②学生を自己調整学習者に育てるために、授業オリエンテーションに「学習のすすめ方(見通しをたてる)を自身で決めるシートを提供した。③さらにまとめではARCSの紹介を追加し学習意欲について触れた。 ④学習課題に合った学び方(教え方)のためにメリルの第一原理を活用した。特に応用の部分では「このようなときはどうするか」を考えさせる質問を用意した。	学生の反応がわからない(授業評価がわからない) しかし、昨年度の授業より学習目標と内容の整合が取れた、自律学習につながる講義になったと思う。	研修を計画、見直すときに使っている。
・グループワーク前の講義で、グランドルールを話し合い、決定する。学生には、全体のグループワーク終了後、グランドルールが活用できたか、振り返りをしてもらう。	・毎年、グループワークが一部の学生中心に偏る傾向があったが、学生のコメントから、グランドルールを決めていたので、各自が一つずつ発言をしたり、期限までに課題を終わらせるように協力してできた、というコメントがあった。	興味をもって、相談に来る先生に対して、アドバイスをしたり、一緒に授業内容を検討している。
1. 研修の目標に到達できるように、研修レポートを期間内に再提出できるようにした。 2. 自分で計画して学習をすすめられるように、院内研修一覧を院内掲示板に掲載するとともに3月・4月の広報誌に「研修受講計画を立てよう！」と計画例を掲載した。	1. 学習者側、教育側にとって「OK!」と自信をもって研修修了できる。教育側にとっては、どこがわかりにくかったのか・・・と改善につながっていると感じている。 2. 学習者の手ごたえはないけれど、研修を提供する専従者には説明することができた(まだ、自己満足の状態)	わからない。 会議で取り組みを紹介するなどして、実践を継続したい。
反転授業として設計したうえで、ライブ授業においては、学生が集まり(グループワークと	教員による個別フィードバックだけよりも、グループワークを通じ、学生自身が自分自身の現状、超	残念ながら、自分自身の実践を他教員に紹介しておらず、反応を得ていない。非同

<p>して)学生自身で問題解決していくというやり方に改めた(以前は、質疑応答という形を取りながら、結局教員が説明していた)</p>	<p>えるべき課題をしっかりと認識した印象を持つ。これは学生の振り返りノートの記述からの推測である。なお、振り返りノートは学生間で共有公開する仕掛けとした。</p>	<p>期で授業改善の取り組みや悩みをシェアできる仕掛けを用意するべきかもしれない。仕掛けだけでなく、教員(自分)のマインドも変わっていく必要を感じている。恥ずかしがらずに。</p>
---	--	--

#### <6ヶ月後追跡調査の結果(無料版)>

教育改善スキル修得オンラインプログラム 自律学修支援編の無料版受講者を対象とした6ヶ月後追跡調査(アンケート対象者61名のうち1名)では、「このプログラムを同僚や後輩等、周りに進めたい」の設問に対し、「とてもそう思う」との回答を得ました。また、「今後、類似した問題に直面した時の解決の手がかりがつかめた」、「今後、自身の教育改善のため、本プログラムで得た成果を活用するつもりだ」の設問に対しても、「とてもそう思う」、「ややそう思う」と回答し、肯定的な反応を示しました。現在も学習進行中とのことで、「自律学修支援編」で完了していない部分に再チャレンジする気持ちはありますか」の問いに対し、「とてもそう思う」と回答し、「今後、無料版のみならず有料版の受講も考えている」との問いにも「ややそう思う」との回答を得ました。今後も、無料版受講者に対し、有料版募集案内を積極的に行っていきます。

# 共同利用拠点事業⑥ FD活動デザイン編

本センターでは2021年から、  
FD活動の設計について学習するオンラインプログラム  
「教育改善スキル修得オンラインプログラム-FD活動デザイン編-」  
を開発・公開しています。

履修証明プログラム第3弾として、FD担当教職員向けの新たな講座「FD活動デザイン編」の提供を開始しました。本プログラムは、令和2年度末に発出した「オンライン教育の新たなモデルの構築に向けた提言」および「FD活動の客観的な成果分析の枠組みについての提言」の内容を踏まえて、コロナ禍後を見据えたオンライン教育を定着・発展させることができる教職員の育成を試みています。本年度に無料版を公開し、その後、有料版第1期を募集し、10名の方が修了されました。

教育改善スキル修得オンラインプログラム (FD活動デザイン編)

<https://kyoten1.cica.jp/moodle3/>

日本語 (ja) ログイン

## 教育改善スキル修得オンラインプログラム (FD活動デザイン編)

アナウンスメント 表示するニュースアイテムはありません。

### ホーム画面

初めてアクセスされた方へ

本教材へようこそ。まず、右のボタンをクリックして、このプログラムの学習の進め方を一緒に確認しましょう。

学習の進め方

ナビゲーション

- ホーム画面へ戻る
- 学習状況証明書を発行 (無料ユーザー向け) 証明書はいつでも発行可能
- 学習状況証明書を発行 (有料ユーザー向け) 有料ユーザーのみアクセス可能です。

カレンダー

2023年 02月

月	火	水	木	金	土	日
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28					

モジュール1：FDはこのままでよいのか (大学のワンランクアップに向けて)

モジュール1では、「問題提起：IDはFDの基礎になるか?」や「FDの義務化はどのように始まり何をもたらしたか」といった観点から、FDに関する5つの物語を学習します。

アクセスする  
アカウントなしで閲覧可能

モジュール2：FD活動のKPI (評価指標)：FD活動をアピールするための7つの提案

FD活動のKPI (評価指標)として、どのようなデータを収集・評価すべきかについて学習します。

アクセスする  
\*要ログイン

モジュール3：FD研修のバージョンアップ：年1回の講演会を超えるための7つの提案

年1回、イベント型で行うFD研修ではなく、「事前資料付講演 (反転授業型)」や「事前課題+アクションプラン作成」といったFD研修の7つのアイデアについて学習します。

アクセスする  
\*要ログイン

モジュール4：ラーニングコモンズの活動を設計する：授業以外の学習支援の7つの提案

モジュール4では授業以外の学習支援として、「チューター研修と認証」や「参考文献よりもジョブエイド」といった7つのアイデアについて学習します。

アクセスする  
\*要ログイン

図:FD活動デザイン編のトップ画面

## プログラムの学習内容(有料版と無料版)

無料版の学習者は各モジュールで知識を学習、自身が学習したことを身につけることができましたのかを確認するクイズを受験することができます。

一方、有料版学習者に対しては、無料版の範囲に加え、自身の担当研修の修正案に関する他の学習者とのディスカッション、教員による添削が受けられる課題提出まで提供されます。

また、有料版学習者に対しては2回の対面学習が開催され、各対面学習では学習者がモジュールを学習しているときに感じた疑問点を共有、議論する機会を設けています。

各モジュールで学習しながら自身の担当研修を修正することで、本プログラムの修了後、すぐに改善した状態の自身の研修を実施できるようにしています。

表:各モジュールの対象者及び内容

モジュール名	対象者	内容
モジュール1:FDはこのままでよいのか(大学のワンランクアップに向けて)	無料版 有料版	「問題提起:IDはFDの基礎になるか?」や「FDの義務化はどのように始まり何をもたらしたか」といった観点から、FDに関する5つの物語を学習します。
モジュール2:FD活動のKPI(評価指標):FD活動をアピールするための7つの提案	無料版 有料版	FD活動のKPI(評価指標)として、どのようなデータを収集・評価すべきかについて学習します。
モジュール3:FD研修のバージョンアップ:年1回の講演会を超えるための7つの提案	無料版 有料版	年1回、イベント型で行うFD研修ではなく、「事前資料付講演(反転授業型)」や「事前課題+アクションプラン作成」といったFD研修の7つのアイデアについて学習します。
モジュール4:ラーニングコモンスの活動を設計する:授業以外の学習支援の7つの提案	無料版 有料版	モジュール4では授業以外の学習支援として、「チューター研修と認証」や「参考文献よりもジョブエイド」といった7つのアイデアについて学習します。



## アクセス数

2022年4月から2023年3月までの間にオンラインプログラム(FD活動デザイン編)へアクセスした訪問者数(IPアドレス)および、無料版プログラムの学習を修了しデジタルバッジを取得した学習者の数は以下の通りです。

モジュール名	訪問者数 (IPアドレス)	無料版プログラム: デジタルバッジ取得者数
モジュール1:FDはこのままでよいのか(大学のワンランクアップに向けて)	188	20名
モジュール2:FD活動のKPI(評価指標):FD活動をアピールするための7つの提案	39	12名
モジュール3:FD研修のバージョンアップ:年1回の講演会を超えるための7つの提案	38	17名
モジュール4:ラーニングコモンズの活動を設計する:授業以外の学習支援の7つの提案	37	18名

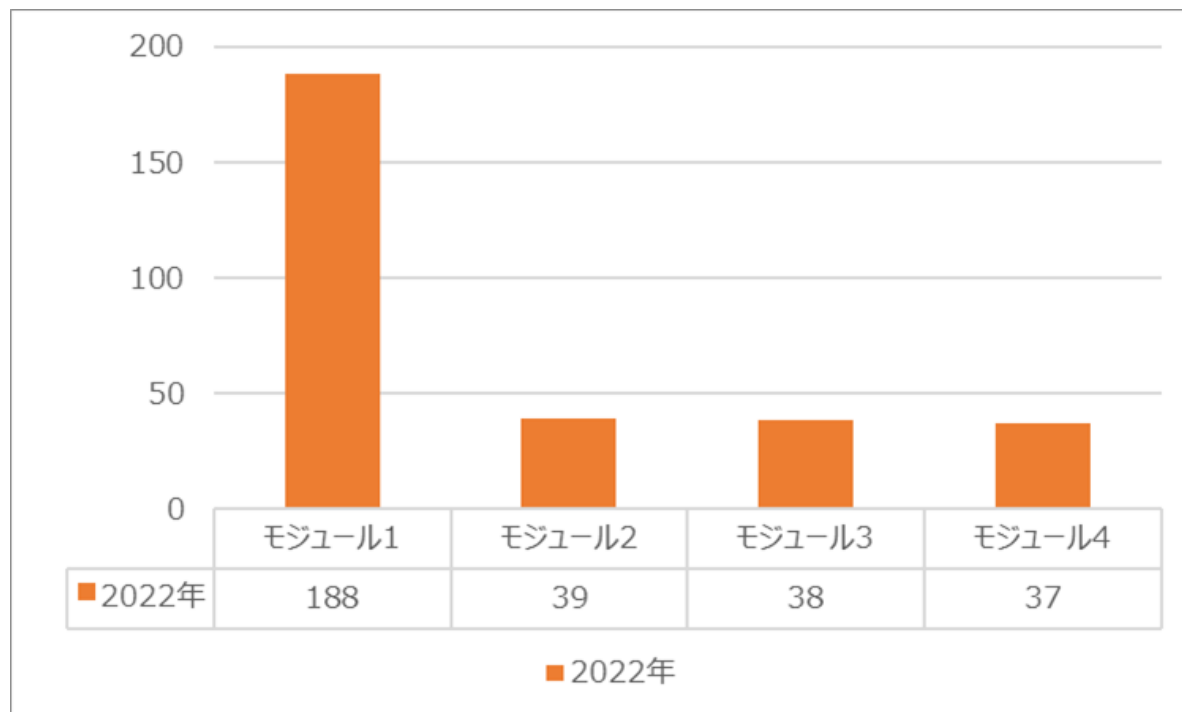


図: サイトへのアクセス数(IPアドレス)(2022年度)

## 受講後アンケート調査の結果

教育改善スキル修得オンラインプログラムFD活動デザイン編(第1期)の受講直後アンケート(修了者10名のうち6名(バッジ取得者のうち60%)では、以下、1)~4)の設問に対する回答を求めました。

1)各モジュールの学習内容について、何か改善してほしい点があれば教えてください。

「個人的に難易度が非常に高かった。実力テストを2回不合格となったときはどうしようかと考えた」など、モジュール2、3の力試しテストに関する回答が見られました。これらの意見を踏まえ、今後、力試しテストと複合練習問題の修正作業を検討します。また、「モジュール1で提出した活動計画を最後まで活用し、最終課題として活用することを最初の段階で把握しておきたかった」や「動画教材があると良かった」など、課題や学習内容の提示方法に関する回答も見られましたので、今後、改善を検討します。

2)学習を促すメールとして各キックオフミーティングや対面学習の前に学習を促すメールを配信しました。これらはあなたの学習の進捗に役に立ちましたか？

回答者全員が「役に立った」と回答し、その理由として、「学習計画を立てやすくなり大変ありがたかったです」、「研修プログラムや仕事を交互に行っておりましたので、自身がどこまで進んでいるのか、あとどこを進めればよいか、確認のご連絡が大変ありがたかったです」、「細やかなサポートメールであり、自分の進捗を絶えずチェックして頂き、期限内に学習を終了できる様にサポートして頂いた」等の回答を得ました。

3)オンラインプログラムについて、どのような印象を持ちましたか？

オンラインプログラムの印象について、ARCSモデルの各要素別に1~7段階で回答を求めました。

【A:注意】回答者全員が肯定的な回答を行い、その理由として、「オンラインで学習する学生の立場を理解でき、オンラインの学習性の高さを実感できた」、「いろいろな理論や、実践を系統立てて学べている実感があった」等の回答を得ました。

【R:関連性】6名中5名の回答者が肯定的な回答を行い、その理由として、「初めてのFDに関する研修でしたので、難しかったところもありましたが、やりがいがありました」、「オンラインで場所にとらわれず、履修できることと教材も学習を進めやすかった」等の回答を得ました。一方で、1名の回答者からテストの難易度が高かったという意見もありました。

【C:自信】6名中4名の回答者が肯定的な回答を行い、その理由として「自身で学習したことを対面学習でディスカッションし、内容を深められたから」や「今まで所属先センターで試行錯誤していたことはそんなに間違っていないことがわかったから」等の回答を得ました。一方で、「周りの(受講者の)先生方がすでに習熟されている方たちだったので、若干委縮気味であった」や「力試しテストが難しかった」との意見もありました。

【S:満足感】回答者全員が肯定的な回答を行い、その理由として、「漫然と何となく把握していたことが整理できたことが一番の要因」、「学習を続けることで理解が深まることを実感し取り組んで良かったと感じたから」等の回答を得ました。

## 1ヶ月後アンケート調査の結果

教育改善スキル修得オンラインプログラムFD活動デザイン編(第1期)の受講直後アンケート(修了者10名のうち5名(バッジ取得者のうち50%)では、以下、1)～4)の設問に対する回答を求めました。

1)受講目的のうち、達成できたと感じられるものを選択してください

回答者全員から、「自身のキャリアのため」や「業務の関係上、必要だったため」という回答を得ました。

2)達成できた受講目的に対して、最も寄与した学習内容について教えてください。

職場に受講と修了したことを報告する際にバッチのページを印刷し提出した。
モジュール4の「ラーニングコモンズの活動を設計する」において、通信制大学にて学習支援室のような場所を考えるうえで、様々な必要な情報を学ぶことができたと思います。
今後オンライン授業の改善を業務とする部署に所属するため学術的な基礎スキルを習得するために受講しその目的を達成することができました。
研修制度やチューターの利用もFDに入るというのは目から鱗だった。これまでやっていたこと・やろうとしていることが含まれることがわかり、今後の活動の整理にも役にたった。
IDとFDとの関連、職員としての教育プログラムへのかかわりなどが体系的に学べたこと。
教員のFD活動を支援するための「FD支援室」の新規設立に伴い、FD活動とはどのようなものか、自身で理解できていませんでした。今回の教育改善スキル修得プログラムにて、FDとは何かを学ぶことができたと思います。特にモジュール2「FD活動をアピールするための7つの提案」では、FD活動の評価方法について学ぶことができ、これから自身でFD研修等を考える際に、どのように評価すればよいか、参考にしたいと考えています。

# 共同利用拠点事業⑦ ラーニングテクノロジー ワークショップ

本センターでは2021年から、  
ラーニングテクノロジーについて学習するワークショップを  
実施しています。

## 本年度の取り組みの概要

本取り組みでは2021年度に引き続き、2020年度以降に緊急避難的に急遽実施された高等教育のオンライン化の中で明らかになった諸問題の解決方法を提示し、また、教育のオンライン実施がコモディティ化したことを土台として、従前の教育形態では実現できなかった教育やFDを実現するためのラーニングテクノロジー(人工知能技術やラーニングアナリティクス等)活用方法を実習形式で学ぶことのできるワークショップを大学教員向けに実施しました。

具体的には、国内で最も利用されているLMSであるMoodleの最新動向、分析等に活用できるJupyter Notebook等、近年、高等教育で利用され始めている技術について学習するワークショップを、特定非営利活動法人くまもとLRネット、日本教育工学会(JSET) SIG-AI(人工知能の教育利用)、大学eラーニング協議会(UeLA)システム運用部会との共催の形で実施しました。

## 2022年度：ワークショップ一覧

以下のワークショップを開催しました。Zoomによるオンライン開催ですが、全国から多くの教員・職員等が参加しました。

表：2022年度ワークショップ一覧

日時	タイトル	概要	参加人数
2022年8月20日	特定非営利活動法人くまもとLRネット、熊本大学教授システム学研究センター共催「Moodle4.0ワークショップ」	最新版である Moodle4.0の特徴について概説し、クラウド上のサーバにMoodle.e4.0をインストールする実演型ワークショップ 1. Moodle 4.0 の概要(3.9 との比較など) 2. Moodle 4.0 の導入 3. Moodle 利用に関するQ&Aセッション 担当: 喜多 敏博(熊本大学 教授システム学研究センター 教授)	21名
2022年10月15日	特定非営利活動法人くまもとLRネット、熊本大学教授システム学研究センター共催「Moodleワークショップ」	2022年9月25日から30日までバルセロナで行われた Moodle Moot Global 2022 の様子の報告等 1. Moodle Moot Global 2022 参加報告 2. 次期バージョン Moodle 4.1 LTS について 3. Moodle 利用に関するQ&Aセッション 担当: 喜多 敏博(熊本大学 教授システム学研究センター 教授)	22名
2023年2月25日	熊本大学 教授システム学研究センター JSET SIG-AI(人工知能の教育利用) UeLA システム運用部会共催「Jupyter Notebook ワorkshop」	ブラウザからプログラミング言語Pythonを実行できるサービス「Google Colab」を用いて、Excelなどでは読み込めないような巨大なデータファイルを読み込み、その統計量を計算したり可視化したりする Jupyter Notebook を各自試してみる入門ワークショップ 1. Google Colab の利用方法 2. 巨大なデータを読み込んでグラフ化する 3. Jupyter Notebook / Google Colab 利用に関するQ&Aセッション 担当: 喜多 敏博(熊本大学 教授システム学研究センター 教授)	30名

## 実践事例集の公開

本取り組みとして実施したワークショップ・研究会で提供した学習コンテンツや資料は、基本的にMoodle上で誰でもアクセスできるように公開されています。それらの公開されたコンテンツのうち、特に利用ニーズが高そうなMoodleやZoomの活用方法について、「実践事例集」としてまとめ(下図参照)、公開する予定です。

実践事例集では、一般的なツールの使い方に関する解説ではなく、「Moodleを活用して自動採点テストで学習者に独習させる方法」や「Zoom講義中に学習者の反応を確認したい」等のトピックごとに情報をまとめ、提供しています。(https://mdqu.rcis.jp/course/view.php?id=16)

### 教育支援ツール活用のための実践事例集

Home / コース / moodle活用 / 事例一覧

事例一覧 Moodle Zoom 全体

本ページでは2021年度に熊本大学教授システム学研究センターが提供したワークショップを元に、MoodleやZoomといったICTツールの活用に役立つような情報を掲載しています。興味があるものをご利用ください。

#### Moodle編

自動採点テストで独習させたい【Moodle】	アクセスする
小テストの設定方法やランダム化について解説しています。 サンプル有	
学生相互のやりとりで学習させたい【Moodle】	アクセスする
提出物が全員に見えるようにし、相互にコメントを書かせる方法等について解説しています。	
学生の状況をモニターしたい【Moodle】	アクセスする
学生の出席（Moodleコースに入ったか）を確認する方法等について解説しています	

#### Zoom編

Zoom講義中に問いかけて反応を見たい【Zoom】	アクセスする
提出物が全員に見えるようにし、相互にコメントを書かせる方法等について解説しています。	

#### ラーニングテクノロジストの育成



教授システム学専攻は2022年度より、ラーニングテクノロジストを育成するカリキュラム（博士前期課程）を提供します。詳しくは以下のリンク先でご確認ください。

- 教授システム学専攻：博士前期課程カリキュラム
- 教授システム学専攻：ラーニングテクノロジスト詳細

#### Moodleの利用方法をもっと知る



以下のサイトでは、このページで紹介しているMoodleの利用方法について、より詳細に情報を掲載しています。

- 熊本大学：eラーニング推進室
- Moodle公式ドキュメント

図：教育支援ツール活用のための実践事例集





各トピックの説明ページ例は下図の通りです。小テストの種類や作成方法といった一般的な情報だけでなく、「毎回違う問題を出題したい」や「複数の小テストの総合点を出したい」等、より高度な設定についても説明をしています。

さらに、自組織のMoodleへリストア（ファイルをアップロード）するだけで、設定済みの小テストを入れることができるサンプルをいくつか提供することで、自力での設定が困難な人でも機能を活用できる仕組みを提供しています。

また、ツールの活用方法に関する説明だけでなく、本センターがこれまでに提供してきた教育改善スキル修得オンラインプログラムで紹介されている学習コンテンツ等、機能と関連する、学習設計の観点からも役立つような情報も参考情報として掲載しています。

## 教育支援ツール活用のための実践事例集

Home / コース / moodle活用 / Moodle

事例一覧
Moodle
Zoom
全体

### 自動採点テストで独習させたい【Moodle】

**概要**  
Moodleでは、「クイズ」機能を利用して、知識やスキルを習得できるまで、学習者に練習をしてもらうことができます。以下にクイズの形式の説明、サンプルを掲載していますので、ご利用ください。

**小テストの種類や作成方法：**

-  小テストを作成する（作成方法や種類に関する説明）
-  問題のタイプの一覧
-  ドラッグ&ドロップテキスト
 


-  穴埋め問題 (Cloze)

**小テストと関連する設定：**

-  小テストの設定「レビューオプション」（学生からの見え方を確認したい）
-  小テストでランダムに出題（毎回、違う問題を出題したい）
-  評定計算（複数の小テストの総合点を出したい）

いくつかの小テストなどの点数を重み付けして、総合点を出すには⇒「評定」の評定項目に「計算」を使うのが分かりやすい。自由に計算式を書いて、総合点に対する配点（重み付け）の調整ができる。

**サンプル：自身のMoodleへリストア（挿入）できます。リストア方法はこちら**

-  Moodle小テスト：多肢選択式
-  Moodle小テスト：ドラッグ&ドロップテキスト
-  Moodle小テスト：穴埋め問題
-  Moodle小テスト：○×問題

**実用イメージと参考情報**  
クイズ機能を利用することで、例えば、「（1）授業の前にLMS上で学習し、クイズに合

### ラーニングテクノロジストの育成



教授システム学専攻は2022年度より、ラーニングテクノロジストを育成するカリキュラム（博士前期課程）を提供します。詳しくは以下のリンク先でご確認ください。

- [教授システム学専攻：博士前期課程カリキュラム](#)
- [教授システム学専攻：ラーニングテクノロジスト詳細](#)

### Moodleの利用方法をもっと知る



以下のサイトでは、このページで紹介しているMoodleの利用方法について、より詳細に情報を掲載しています。

- [熊本大学：eラーニング推進室](#)
- [Moodle公式ドキュメント](#)

図：教育支援ツール活用のための実践事例集  
例：自動採点小テストで独習させたい

🏠 2023-0225

- 📁 一般
- 📁 Google Colab を使う準備をする
- 📁 今回のワークショップで使うipynbファイル
- 📁 参考にしたオンラインリソース
- 📁 (PR) 熊本大学 大学院 教授システム学専攻 学生募集

🏠 Home

📅 カレンダー

## Jupyter Notebook 利用事例ワークショップ

Home / コース / 2023-0225

熊本大学 教授システム学研究センター (RCiS) 喜多敏博

本ワークショップは、  
熊本大学 教授システム学研究センター <https://www.gsis.kumamoto-u.ac.jp/>  
JSET SIG-AI (人工知能の教育利用) <https://www.jset.gr.jp/sig/sig-ai/>  
UeLA システム運用部会 <https://uelajp/subcommittees/>  
の共催イベントです。

### Google Colab を使う準備をする



Google Colab を使ったことがない方は、この動画を参考にして準備をしてみてください。

 [ちなみに、「Google Colaboratory」の読み方は...](#)

### 今回のワークショップで使うipynbファイル

-  [large\\_data\\_analysis.ipynb](#)  
わざと間違ったコードを含んだファイルです。間違いを直しながら実行してみてください。
-  [実行方法の手引き](#) 17.9MB PDFドキュメント  
今回の ipynb ファイルを実行した結果の画面を、このPDFファイルで見ることができます。  
(最初に必要な、Googleドライブのマウント方法も含まれています)
-  [large\\_data\\_analysis1.ipynb](#) (正しく実行できるファイル)  
答え合わせにどうぞ。

### 参考にしたオンラインリソース

-  [Excelの最大行数と最大列数について \(16ビットによる違い\) \(Office Hack\)](#)

図: Jupyter Notebook事例

2023年3月31日

コンテンツ制作者：  
教授システム学研究センター教職員

監修者：  
喜多敏博(教授システム学研究センター教授)

編集担当者：  
山下藍(教授システム学研究センター特定事業研究員)  
鈴木真保(教授システム学研究センター連携研究員)  
篠塚麻衣子(教授システム学研究センター特定事業研究員)